愛國婦人會機關　愛國婦人會の目的は遺族及癈兵を救護するにあり

愛國婦人

每月五日二十日發行
一部金參錢　一ヶ月金六錢　半年分參拾六錢　全國無遞送料
廣告料一行六拾錢
本誌全部禁轉載
東京麹町區（牛ケ淵公園）愛國婦人發行所
印刷人 山澤俊夫
編輯人 大久保高明

社説

變化の調和

先月中旬日本盲人會第一回總會を東京に開かれし際、盲人某氏の席上演說に、昨日東京音樂學校にて、西洋音樂を聽きしに、眼の樂みなき余には、如何にも樂しく面白く感ぜられたり、されど取り分け感心したるは、バイオリン、笛、太鼓、喇叭、ピアノ等種々の樂器が、それぐ特有の音を出すに拘はらず、全體としては極めて能く調和して、結構なる音樂をなせることなり、世間は競爭嚙み合にて、變化の上に不調和を呈することとなるが、願くは我々盲人は、爲る仕事は異なるとも仲よく調和して行くこと、なほ昨日きゝし音樂が、變化の中に調和あるが如くならしめんことをと述べられたるを、傍にて聽きて、面白きことを言はるゝものかな、我等も演奏會には屢々行きしことあるも、唯音の美にきゝとれて、それもよくは分らずして、人並みに聽いた振をして歸るなるに、この人は、それ以上の聽き方をして、おまけに變化の調和などいふ面白き所に氣付かれたには、我等眼開きの及ぶ所にあらずと、感心したることなりき。依て思ふに、變化の調和といふことは、一り盲人社會に必要なるのみならず、すべて處世の上、仕事の上に必要なり。先づ家庭に就て言はんに、舅姑、主人、主婦、僕婢と、それぐの役目あり、子供はまた子供なりに役目ありて、互に他を侵さず其役目を盡し行く所に、一家の調和はあるものなり。而して其間に在りて主婦の役目は、合奏に於ける指揮者の如きものにて、その手にせる杖の振り方上げ下げ如何によりて、合奏は如何樣にもなるもの、指揮が下手にては、如何に個々の奏樂家は上手にても、音樂とならざると同じく、家庭の調和は、主婦次第といふも、過言にあらず、主婦が氣が利きて、思ひやりがありて、忍耐に富みて、春日の如く暖くうらゝかなれば、一家も之に化せられて波風の立つものにあらず。之れをその反對に、主婦が何時も膨れ顏して人より先きに憤り出し、泣き聲出してわめきては、如何に佛のやうなる舅姑もそうぐは我慢できず、つい一言二言は言ひたくなるものなり、板挿みとなれる夫の苦痛は言ふも更なり、叱られたる鬱憤晴らしに、罪もなき子供はなぐられ、下女は叱り飛ばされて、誂へ向きのごたぐの絶えざる家庭は出來上るなり。されば家庭には主婦が萬事飮み込みて、甘く舵を取ること必要なるを知るべし。

獨り家庭のみならず、人の頭に立ちて大勢の者を使ふもまた然り。人心統一せず步調亂れては、如何に個々の兵士は強くとも戰ひは負けに極まれるが如く、すべて仕事をなすには、全體の步調揃はざれば、決して良き成績の擧るものにあらず社會の繁榮には人民の一致必要なり、國家の繁榮には擧國一致の必要なるは、改めて言ふまでもなし、尤もこゝに一致といふは單調なる一致にあらず、各が其特長を發揮して十分働きながら、全體をして調和すること、なほ彼の合奏の巧妙に進行するが如くなるべきなり。教訓は到る所にあり、唯我等の心眼盲し、心耳聾して、機會に觸れてこれを捕へざるのみ、獨り音樂に於てのみと言はんや。

若き妻

娘が結婚して新婦となり、紅、白粉を付けて若い者らしくして居るは、尤ものことなれども、嫁して年久しくなれる者が何時も若き妻の如く、化粧にのみかゝりて、內の仕事もせず、唯笑ひ興じてうかぐと暮らされては、家の內は暗なり。妻は年相當にふけるがよし、子があればあるらしく、世帶じみればこそ、家の堅めとこそはいふべけれ。女房の何時までも若きは、家の呪ひと思ふは誤りか。

日本海海戰第二回紀念日繪はがき（明治三十八年五月廿七日午後三時敵艦大破の光景）

時間は金にあらず

世界一の富者にして石油王といはるゝ米國のジョン、ロックフェラーは、一日の收入凡そ二十萬圓なるより割り出して、或る新聞社は、無代價の會見の不合理なるを思ひ、二千圓を出すべければ、何卒訪問記者に十五分間の會見を許されよと申込みしに、ロ氏は體よく之を謝絶せりといふ。時間は金なりとは、時間の大切なることの形容なれども、日本人ことに婦人には、時間は金にあらず、かなくそなりと言ふ人あらば、我等は何んと辯解せんかと思ひ煩ふなり。

虛飾を斥け修養せよや

三宅花圃

目に見えぬ鬼神の心を哀れと思はせ、猛き武士の心を慰むる敷島の道にしても、なほ言葉にほどぐの飾は要するなり。至誠人を動かすなどいふ演說にも、手を振り、眉を揚げ、卓をうつ、孰か飾の他なからん。花の咲き香るも鳥のまひうたふも、亦萬物のそれぐ飾を忘れぬ例ぞかし。殊に女は、人の世の飾と見なさるゝを、朝夕身の飾は斷じて忘れざれ、只管優美に起居振舞してとはいふもの、かの過ぎては及ばぬに勝れりとぞ、何かは家を外にして出あるき、某々の會集に華美を衒ひ言葉の花を咲きゝそはせ、實ならぬ物語に日を消する要やあるべき、誠に今の世にいふ、女の活動とか、世に立ちて家事の暇には、分に應ぜん事業に力を添ふべきはよし。さりとも秩序といふ素養なく、唯口喧ましくいひ合ふには多少の持論はありながら、發表すべき術をしらず、如何にと思ふことも所謂多分にもれじとて、唯々と隨ふも多きやにおぼゆるは、女の徒に心强にして、左右孰にても可きを、あだに力立てして、右といへば左といふよりは、少し優りざまなれど、自ら信じたる事をなすはいかで恐しからむ、心用ゐのほどもゆかしくて能く問ひあきらめむと、さらばいかで左をと反問すれば、理由のとるに足ぬに、聞し者のあたらなど斯る人に係り合ひけむと、爪彈きをさるゝがあり、確と思ひ定めし上は然るべき理由も存ずる筈なりかねては、自分の心の中に、再應思ひ考へて、扨人には發意しつべき、かくいひては笑はれやせむといふは、また心中の練磨の足らぬなり、笑はれてもよしといふも、未だ確としたる決心のなきなり、爭か自身に信じたることを行ふに人の心を推量る要あるべき、推量らずして事を行ひ扨人の同情を得ぬは身の修養の不足なりしを自覺せしよき教訓なり。暫時は沈默の間に處して、不過を補ふ樣に力めつべし、漣の徒に岸に立騷げども、大海の底の心を知らぬ樣なるは、今の世の女の會合の樣に覺ゆるものを、若し茲に一事につきて誠に志の有る者あらば、先づ一度は手足の動作を止めて、一時を沈思に過ぐせ、戰事多端の折、さし迫りたるには、四顧に遑なくして、前面にのみ向はんを最利とすべけれど、今や太平うたふ代にしても、心ゆるびの身の裝飾沙汰にのみ心を勞すまじきなり。いつかは役にも立つべき綳帶を卷くを覺えんもしかるべく、此度の經驗を基にして、倘時に鑑みて動ぜぬ覺悟の修養を積まむぞよき。とにかくに一かど得たりと思ふ筋あらば彼の喧しき女の會合に、唯衣類の配合寶石の價値を語合ふに萬々優れる家事の經驗若くは社會の組織につきての希望などを交互物語りて今少し秩序ある誠に會合らしき會合を爲したきなり、いかにぞや。

入田知紀

いく千度かきにごしてもすみかへる
水や御國のすがたなるらむ

電話番町五百二十番

◎本號には米國シヤトルに於ける愛國婦人會の黑木大將一行歡迎の光景を寫眞版附錄とす

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

論叢

天長地久

文學博士　南條文雄

此四字は老子道德經第七章の第一句てあつて、其章の全文を延べ書きに致せば左の如くてあります。

天長く地久し、天地能く長く且つ久しきゆゑんは、其自ら生ぜざるを以ての故に能く長生す、こゝを以て聖人其身を後ちにして身先きだち、其身を外にして身存す、其私なきを以てに非ずや、故に能く其私を成す。

右の一章を佐藤牧山先生の老子講義には左の如く解釋してあります。

天のつくるためしなく、地のつくるためしなし、天地は長久にして、疆り知られぬものなり、そも〳〵天地のよく長久なるゆゑんは、天も無心、地も無心なるものにして、己れ長くながらへんとするの意なし、夫故に天地ともにおのづからよく長久なるものなり、こゝを以て聖人も無心にして、其身を後にし、先きだゝんとはしたまはざれども、つひには其身先となりたまひ、其身を外けて、存せんとはしたまはざれども、つひには其身存したまふなり、夫れ聖人は其身を思ふ意なきを以てにあらずや、夫故によく其身一分のこと成就するものなり、本文の私とは己一分のことを云ふなり、邪曲のことにあらず。

實に大明に私照なく、大公に私親なしとある古語の如く、世界第一の大光明をもつ所の太陽は、誰彼の差別なく、平等に照すなり、それて公平無私にして至大公正なる聖人は、私の親みなし、即ち聖人は天地と其德を一にし、日月と其明を同じくするの德ありと申してあります。本邦に於て、天皇陛下の御誕辰を天長節と呼びたまふに對して、皇后陛下の御誕辰を地久節と稱し奉ること、昨今の諸新聞又は雜誌類に見へてあります、實に我が兩陛下の御寶壽を天地の長久なるが如くにあらせらるゝ樣とし祝し奉るは、臣民の至誠心と存じます。

天長節の名の濫觴は、續日本紀卷三十三(國史大系第二卷五百八十八頁)に、光仁天皇寶龜六年九月十二日の詔勅を揭げてあります、詔勅は漢文なるを、左に延べ書し奉ります、

勅すらく、十月十三日は是れ朕が生日なり、此の辰に至るごとに感慶兼ね集まる、宜しく諸寺の僧尼をして每年是の日轉經行道せしむべし、海內の諸國幷びに宜しく屠を斷つべし、內外百官餔宴を賜ふこと一日、仍て此日を名けて天長の節と爲す、希はくは斯の功德を廻らして先慈に虔奉し、此の慶情を以て普く天下に被むらしめんことを。

此の勅語の中の、感慶兼集の四字は、實に有り難き大御心と感佩し奉ることであります、即ち感とは皇妣生育の恩に感じたまふことにして、慶とは玉體の御安泰を慶びたまふ御事と恐察します、續日本紀卷三十一(國史大系第二卷五百三十一二頁)に、

天宗高紹天皇(光仁天皇)第四十九代天皇、諱は白壁の王、近江大津の宮の御宇天命開別の天皇(天智)の孫、田原の天皇(施基皇子)第六の皇子なり、母を紀の朝臣橡姬と曰ふ、贈太政大臣正一位諸人の女なり、寶龜二年十二月十五日追尊して皇太后と曰ふ。

とありまして、皇妣紀氏は天皇の御即位以前に已に崩御なされたことゝ存じます夫故特に御誕辰に當り、若し母后御存命ならばとの御感情は一層深く在らせられたる御事と察し奉ります、此れ全く平素の御孝心を、御誕辰の機に會して、天下後世にまでも此勅語を以て知らしめたまふことゝ申すべきてあります。

右の詔勅に先慈とあるは、先きだちて崩御の慈母とのたまふ御事にて、老子の第六十七章に三寶の第一として、慈の字を揭げ、慈なるが故に能く勇を說明してあります、慈は愛なり、柔なり、善なり、仁なりとの字訓あり、又愛には惠なりの訓あり、上下貴賤均しく慈母の愛惠柔和善仁の恩を蒙むらざるはなし、左傳の文公十八年の下には、宣慈惠和の文字ありて、其註には、慈とは、愛、心より出てゝ、恩、物に被むるなりとあります、尙因みに愛の字には具さに申せば、親なり恩なり、惠なり、憐なり、寵なり、好樂なり、吝惜なり、慕なり、隱なり、仁なりとの訓ありて、古人の語にも達人は善を兼ね己れを廢して愛を存すとあります母の子に於ける慈愛の如く、己れの私心を廢して國家を愛すべきは勿論てあります。昨日地久節奉祝の、埼玉女子學友會に於て講演いたしました、其中の一端を書き出して愛國婦人に呈します。

婦人事業の模範たらんことを望む

衆議院議員　島田三郎

最近の報告に依れば、愛國婦人會は六十萬の會員を得たと云ふことてある。尙、會長始め役員諸君は、更に擴張して百萬の數に達したいと盡力せられて居るさうてある。誠に盛大なることて結構てあります。

創立の初は近衞公が座長て發起者を寄せられた時は、僅か十人程てあつたさうてある。それから偕行社て發會の趣意を披露せられた時は、來會者が三四十人に過ぎなかつた。當時發起者の奧村五百子女史が、是非十萬人にしたいと物語られた。當初の希望は斯の如き者てあつたが、發起者初め諸君の熱心と時勢に取つて必要なる機關てあるが爲め、創立以來年尙淺きに拘らず斯の如く發達したのてある。初めに當つて此機關は赤十字社の如く、二つのもの相並んで戰時の必要に應じ、又戰後の遺族救護の爲に、恰も車の兩輪の如くにしたいとの希望てあつた。當時は唯だ其希望のみて、事實何れの時に此希望が達せらるゝかと世間も思ふて居つた。然るに日露戰爭に當て全國の愛國心が發揚し、特に從來日本の慣習ては、社會公共の事は男子が之を經營して、女子の之に加はる者あるも其補助に過ぎなかつた。赤十字社も然り、其他の諸機關も大抵左樣てあるに拘らず、愛國婦人會は其名稱の如く婦人を基礎として、男子が之を補助し、其最大多數は婦人て、補助たる男子は極めて少數てある。是は愛國婦人會の特色で、我邦の社會公共事業の中の最も他に異なる所のものてある。

發起者の奧村女史は、其一生の中に種々なる事業に携はつて、或時は政治に、或時には產業に、或時には殖民に、極めて變化多く波瀾に富んだる生涯てあつたが、北淸の義和團事件に我軍隊を訪問し、其勞苦艱難を目擊して同情の念に堪へず歸り來つて此軍人を慰め其勞苦の幾分を減じ、尙其災を少くし、而して其遺族全の救護に務めたいとの志を起して、又力を之に注いだのは其晚年の事業て、其終りの事業てあつた。

奧村女史は激しい氣性の人てあつたが、此晚年の事業の時代には年齡も既に老いて、且肺尖加答兒を憂へて居られたから、其壯年時代の諸種の事業に携はつた頃とは身體も弱つて居られた。それにも拘らず一片の精神から己を忘れて活動し、內國は勿論、或は韓國に或は淸國に旅行して、熱心に此事業を經營された。德孤ならず必ず隣ありて、此首唱者の熱心に動かされて、社會が響きの如く應じて、年代の少きに拘らず斯の如き立派なる團體が成立つた。不幸にして女史は歿せられたが、其遺業は儼然として前途益發達するの見込のあるのは、其人死するとも其遺業は各地より實例を示したのてある、女史は曾て物語つて、自分は政治にも與かり活動もしたが、省れば其結果が無かつた。寧ろ失敗てあつた。それ故に最も婦人に適したる事業に身を委ねて、晚年の月日を有益に送りたいと思ふ。此考が凝つて愛國婦人會の母となつたのてある。此首唱者は既に世を去つたけれども、現在事に當る人々が同一の熱心を以て働いて居らるゝから、會の上には一の變化なくして、社會が既に此團體の有益を認められたから、今後の發達は一層迅速の度を以て現はるゝてあらう。

之に付て一の希望なのは、婦人の與る集會は、特に貴婦人の經營さるゝ仕事は、動もすれば奢侈に流るゝ憂がある。是は經營せらるゝ人々の生活の度が高いから自身には奢侈に流れると思はなくても慈惠團體は其恩惠を受くる人が多くは生活の低きものてあるから、是等と比較して種々なる評が起るのてある。高きものは卑きに附いて目的を遂せらるゝと云ふ格言を思へば、力めて救護する者も救護せらるゝ人の生活を根底として働らかるゝことが必要てある。若し生活の高き度を基礎として事に當ると、集め得た金が眞に救護せらるゝ者の手に入るものが少くして、其間に消費せらるゝのが割合に多くなる。此點は慈善事業に當る人の最も警戒すべき所の事柄てある。且之と共に日本は婦人の事業を諸種の方面に及ぼさんとすれば、婦人が事に當るものは經濟的てあるとの觀念を示すことが緊要てある。

社會の組織が複雜になれはなる程種々の事業が必要てあるので、其中に婦人に適當した時業が增加する。此場合に於て愛國婦人會が婦人事業の模範として存立したいものてある。

何か話すやうにと云ふ求めに對して新しい考案も無いが、思ひ付いた一端をお話致したのてあります。御參考の一端ともなれば誠に幸てあります。

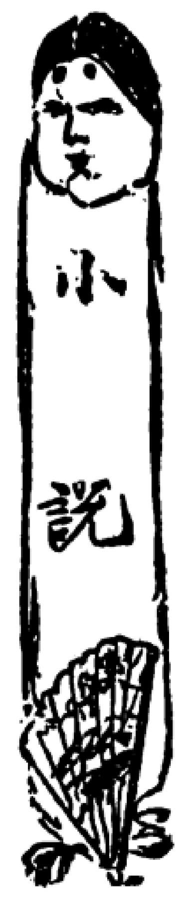
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

所感一則

伯爵　佐々木高行

伯爵齒德共に高し、病み勉めて、兩宮內親王殿下御教育の事に鞅掌せらる、人の時事問題等につきて見ゝ叩くものありと雖も、公務の外賓客を遠けて敢て言はず、左は特に本會の爲めに寄稿せらるゝもの、文責素より記者に在り。

今や我國に於きましては、貴會を始めとしまして、博愛慈善の主義に基きます所の、救護事業が夫々發達して參つて、歐米の夫にも敢て劣らないといふ樣になりましたのは、誠に悅ばしいことであります。然るに是等の事業と申しますものは、いづれも、御維新後の創設であつて、西洋人と交際し始めてからのことでありますからして、是は西洋の美風を眞似たものである、古來の我國人は義勇とか忠烈とかいふ行爲につきましては、頗る勝れて居りましたけれども、慈善とか同情とか申します方面につきましては、著しく缺けて、まことに殺伐なものであつたかの樣に、申す者もある樣子でありますけれども、老生の考へては、是れは少しく我國情に迂濶な議論ではあるまいかと思はれます。元來歐米諸國の如く個人主義の最も發達した國にありましては、父子、夫婦、兄弟、姉妹、の間柄でも、夫夫自分の所有財產と申しますものが區別せられてありまして、容易に其分界を侵すことを許しませぬ、恰も銘々に所帶を持て居る樣なものでありますから、親は金持ても、親類に資產家がありましても、隨分不幸に泣くものも珍らしくないのであります、そこで勢ひ博愛慈善の心を有する人達が集りまして救護團體といふものを作りまして、是等の不幸なる人々を、親疎の區別なく救護することゝなつたのであらうと思ひます、是れは結構なことでありますけれども、彼地の社會組織の上から、自然さうならなければならないといふことになつて居るのであります。翻て古來我國の有樣を見ますのに、我國は家族制度の發達した國でありまして恐れながら、皇室を大宗家と仰ぎ奉り、一皇の下是萬民の栖息する所といふことは事實の上にも國民の精神の上にも、二千五百有餘年來、曾て動かぬ所であります、其家族的の精神の發動する所はまづ一家內の愛情より始まり、一族同姓の中に難儀なものがありますれば、其一族なり同姓なりから援助して、夫々其暮向の立つ樣にしてやり來たものであります、其感情が、隣人、同村、同郡、同國といふ樣に次第に擴く及ぼされて、大きく盡くす上に於てこれを尊皇心とも、愛國心ともいふのであります。即ち其源を我皇室と臣民との關係に發しまして、一家より一國に至り、一國よりまた一家に歸し、一家より一國に至るといふ、其關係の整然たることは、恰も環の端のない樣なものであります。此の一族相救ひ隣保相援くるといふ美風は、今でもなほ存して居りまして、一村內恰も親類の如く吉凶慶吊を共にして居るといふ所も中々少くないのであります。段々地方から出京する人につきまして、先頃の戰爭の折などのことを聞きまするのに、此時は又其親睦の念に敵愾の氣が加はりましたものでありますから、救護の事も一層行き屆た樣子であります、親類緣者とか、隣のものとかゞ交る〳〵來て植付もしてやる刈入れも手傳てやるといふ樣にしてやり、戰死者の葬式、遺族への心付など、餘程手篤くしてやつたといふのが、まづ普通であつたかの如くに聞きました。戰爭中は勿論今に置き貴會を始め種種の團體の援助は、頗る行渡てある樣子でありますけれども、此國風と相俟たなかつたならば、決してかく迄見事な成績を收むることは出來なかつたらうと信じます。其處で老生は世の慈善家、殊に是等の事業に關係して居らるゝ所の、婦人の方々に一つ御注意を願いたいと申すのは、どうか本末を誤らない樣にしてほしいと云のであります。例へば一家の父母に寒い思をさせて、餘所の老人に美服を着せてやつても夫は善行とは申されぬ、一族の者に氣の毒な廢兵があるのを捨て置て、廢兵院に巨萬の金を寄附しても、本當に慈善の目的に適したものとは云はれない……廢兵院で食べる珍味よりは親類故舊の者に振舞はれる雜炊に一入の味が籠て居る……と同じく若しも婦人方が何會の幹事であるの、評議員であるのと、飛び步いて居るのに、家には老人が綻びた衣物を着て居り、赤兒がひもじくても乳が飮めぬので泣て居るといふ樣なことがあつたなら、夫は一家の主婦たる本分を度外したものであつて、決して褒めた行爲とは申されませぬ。されば云て老生は、種々の慈善的事業を無益である、婦人の方が是等の事業に關係して居らるゝを非難するかといふに、決してさうではない、地方の習慣、道德の狀態等によりて、一方には親類故舊の篤き庇護によりて活計を立て居るものがあると同時に、一方には零丁頼る所のない不幸なるものが澤山あります、是等はどうしても、貴會の如き毫も親疎の區別を挾まず、一視同仁の頗る美はしき精神を以て結合して居る所の、團體の救護を俟つの外はないと信じます。即ち是等の事業の益々隆盛ならむことを望み、且つ婦人の方々に向ては、よく働き、よく勸め、よく餘裕を作りて、よく此方面に活動せられむことを庶幾ふものであります。それと共にまた家族制に淵源する所の我國の美風は何處までも發達させたいと思ひます。



殘むの花

三宅靑軒

（上）

拜啓小生の負傷意外に重く、終に兩足とも切斷せてはならぬ事と相成り申し候。就ては豫て申し上げし如く、御令孃敏子殿との御約束は、胡蝶の夢と諦らめ候間、左樣御承知下されたく候。敏子殿へは態と別段の書面差し上げず候、然るべく御傳への程願上候。
敬白。

三十八年　月　日

在金州　武村貞三印

本山浩治殿

との簡單なる書面は、陸軍中尉武村貞三よりの軍事郵便もて、東京麹町の本山浩治方へ配達されたり。本山は某銀行の頭取、何百萬とやらの資產家なり、書中に言へる敏子は其愛子にて、年は十九の美人なり。武村は二十五歲の靑年士官、本山と同鄕の好誼ある有爲の男なり。浩治は今しも銀行より歸りて此書面を打眺め、「ウン、なか〳〵解つた人間ぢや」と獨笑み、「敏、敏」と娘を呼て、「武村から手紙が來たぞ、これを見よ」と放げ出し、「奉天役の負傷は、可愛さうに到頭足無しにして仕舞た。いづれ金鵄勳章ものぢや、喰ふに困るやうな事は無からうけれど、斯う綺麗に言つて來た了簡に對し、わしは一萬兩ばかり金を遣らうと思ふ。ハヽハハ、さすがは貞三、面白い。敏、お前もこれで安心ぢや、足無し中尉の細君になッちや困るからねえ。あの龜山伯からの御內意は此間話したぢやらう、ハ、ハ、、戰爭は媾和になる、お前は武村との緣が切れて華族樣の奧樣になる、めでたいな。酌でもして吳れ」と、其處へ出た膳に向うて大胡座。秋の夕風庭の松を吹て、操いかにと音づるゝ。

（下）

三十九年の四月の上野、井の端の櫻危なき醉どれも去て、不忍の池夕日の黃金を收め、暮色漸く紫の幕を引んとする此處谷中の墓所近きところを、銘仙の綿入に無造作な束髮の、これは又襤褸にくるまる玉の顔、世に美くしき女の、色靑白き髯男乘せたる躄車を輓きて、男と何やら樂し氣に物語りつゝ行く。

通り掛りし人車の男は、「ヤア、敏ては無いか」と驚き聲、忙がはしく車を降りて走り寄て、「貞三さん」と帽子を取る。女も男もはッと俯向きしが、旋て女は顏を上げ、「父樣、敏で御座んす。昨年よりの家出は皆皆に其譯を認め殘しました。貧しきを足し弱きを助けるのが眞の道と承はりまする。一旦夫と許した貞三樣の此御有樣、若しわたくしが御介抱申さなければ誰がお助申しませう。（次頁につゞく）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ハイ私は人の道を踏むだもの、恐れながらあなたへ對して孝行な娘で御座りまする、よく〳〵お考へ下されまし』とはッきり言うて、聲に千鈞の重みあり。

『ウム』と父の浩治は俯向て、忽ちハラハラと涙をこぼし『免して呉れ、敏、過つたわい。さうぢや、人間には、金の外に道理と言ふものがあるな。貞三さん、堪忍して下さい』。

此初花勝五郎は、浩治と共に、殘むの花の夕風に舞ふ巴の中を、さながら天國に居るらん思ひ。『有難い、嬉しい、嬉しう御座んす』の三人の聲は、天の使の言葉なるべし。（完）

育兒のしをり

（上編）つゞき

ドクトル メヂチーネ　長井岩雄

小兒健康診斷の事

分娩までは産科醫の責任にして出産後小兒を小兒科に托するを至當の順序とす。抑々我日本の習慣は小兒疾病に罹つて始めて醫に診斷を受くるを常とす若し夫れ小兒生後健康診斷に付ては一も醫に相談をなさず、尤も之は自然の成行にして敢て父母の不注意とのみ云ひがたく從來日本の小兒科なるもの甚だ幼稚にして育兒に就ての素養學識淺く問ふ人も問はるゝ人も左まで念意せざりしが如し、今や日本の小兒科は大に發達し父母の顧問となり得るの域に進みたれば、愛兒の發育上專門家の意見を聞き日常育兒上の參考とせられなば大に稗益あることゝ思はる

さて小兒は十分なる發育を遂げて出生せしか將發育不全か或は疾病あるか、醫の診斷を待ちて始めて決定するものにして、若し不幸にも小兒の身體に不十分な點あるときは、直に夫れ想應の所置を施さざれば實に該兒終生の不幸となる而已ならず、發育す可き小兒も時機を失しては終に實を結ばずして消ゆることあり、また强健に發育して出産せし子も生後過育の爲めに却て身體を弱くすることあるは前に述たるが如し。されば兎に角、小兒出産の後相當の學歷經驗ある小兒專門家に一應健康診斷を受け、滿一ケ年になる迄は、假令小兒無病なるも折々衞生上の養育法を聽くは、其の子の爲め尤も安全にして恰も石橋を敲きて渡るが如し。萬一小兒生來虛弱なるときは、母乳の檢査は勿論人工榮養の方法其外すべての衣食住に就きて悉く醫の意見を聞きて方針を定むること尤も肝要なり、之を要するに。只愛てふ父母の考のみにて小兒を育てなば、動もすれば、軌道を踏み外すことあるがゆゑに、傍觀者たる醫に衞生上の育兒法を聽くは所謂岡眼八目多少の利益あるは云ふまでもなく恐らく中庸を得べしと思はる。

●急告　愛國婦人の愛讀者諸姉よ本誌の花たる歌、俳句、短文、新體詩など益々諸姉の佳什を得て紙上に光彩を添へんとを切望に堪へず諸姉願くはこの切望を諒とし左の注意事項に由りて陸續寄稿せられんとを

回數	題類	題	選者	期限
第五十七	歌	奥村五百子女史を懐ふ	大口鯛二	七月廿一日 上
		夏	同	六月廿日 上
第四十八	短文	愛國婦人	編輯局同人	六月廿五日 上
第廿八	俳句	田植	同	六月廿日 上
第卅五	新體詩	緑陰讀書	同	六月廿五日 上
		奥村五百子女史を懐ふ	同	七月廿一日 上
備考	○當選者には美しき扇子其他の物品を贈呈すべし　○奥村五百子女史を懐ふ歌と新體詩とは目下編纂中の同女史傳記へも掲げたき希望に付成るべく多數に名什を寄せられんとを希ふ			

家政

裁縫忍草（一）

嗚呼、裁縫家の泰斗渡邊辰五郎氏逝きぬ。氏は下總の人幼少より裁縫を研究し數年にして大に頭角を顯せり。盛壯に及びて東京と千葉とに後進者を養成し、大に盛名を博せり。遂に東京女子師範學校（現今の女子高等師範學校）の裁縫教授に任ぜられ、其名愈顯はる。後、那珂道世、手島精一、鳩山春子、後閑菊野子等教育家諸氏と共に、神田一橋に共立女子職業學校を創立し、實に同校が今日の隆盛を來し、其因を起したり。其後同校を辭し、本郷竹町に東京裁縫女學校を設立せしに、校運漸く進み、今日に於ては、現在在學生壹千人卒業生七千人に及びたりとぞ、盛なりと謂ふべし。されば、今日全國に於ける女學校小學校等に裁縫を教授する多數の女教員は其大半氏の門下若くは其門下より出て、流を汲む人なりといふも過言にあらざるべし。實に氏が女子教育の功偉大なるを思ふ。茲に氏が平常教授されし裁縫上の事共を、され〳〵ながら掲載して、忍草となすになん。

故東京裁縫女學校長　渡邊辰五郎氏肖像

羽織の裏は如何にして積らば便利なるか

羽織の裏を積るには、袖丈を八倍したるものと、身丈を十倍したるものとを加へ、更に縫しろ襟肩など、二尺五寸を加へ、其總尺より表用布を減きたる殘を、裏用布の寸尺とす。

例へば袖丈一尺四寸五歩なれば、之を八倍して一丈一尺六寸となる。身丈二尺六寸なれば、之を十倍して二丈六尺となる。此の二口に更に二尺五寸を加へ三丈九尺一寸となる。是れより表用布二丈八尺を減けば、一丈一尺一寸となる、之を裏用布の寸尺とす。

袴の紐下寸法は如何にして定むべきか

男の袴は着物の着丈に〇、六を乘じたる數を袴紐下の寸法とす。

例へば着丈四尺とすれば、四六、二尺四寸を紐下の寸法とす。

女の袴は着丈に〇、七を乘じたる數を紐下の寸法とす。

例へば着丈三尺とすれば、三七、二尺一寸を紐下の寸法とす。

夏の飮料

これは或る西洋の書物に出て居りましたのを寫して置きましたのですが貴孃方一度試めして御覽あれ

(1) ウイスキー入りのポンス

ウイスキーを洋杯に一盃半

種類は何れにても御宅に有合せのものてよろし

レモン半個の搾り汁

白砂糖を大匙に一盃

氷よき程

先づ砂糖を水にて煉り置きさて用器に氷をかき此砂糖汁を入れレモンを搾り込み之れにウイスキーを徐々と注ぎよく交ぜて用ふ

(2) 炭酸ブランデー

平野水一本

ブランデーを洋杯に一盃

氷塊

平野水を瓶の儘冷し置きブランデーに氷塊を浮べ十分に冷えたるとき氷を除き前の平野水を注ぎながら用ふ

もつとも少量の砂糖水を加へて甘味を附するもよし

(3) 梅乾入りブランデー

梅乾を好みの程を細く刻み濃き砂糖汁に交ぜ之れにブランデーに火を附け焰の上りたる所を垂らし尚ほ少量の熱湯を合ぜて用ふ之れは清涼劑にはならねど夏向き下痢症を治すと云ふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

子供くらぶ

菫と雨

晩花

ある日曜の朝でした。公園の廣場の榎の木の下で

『ア、折角美しく咲いて、妾の姿を人さんに見て貰ふと思ふて居たのに、またあのにくらしい雨がとう〱降て來た。……向ふの森に咲て居る牡鵑花、こちらの池に咲て居る菖蒲、それは奇麗は奇麗だけれど、何だか嫌味ぽくて、とても妾の奥床しい姿とは、一緒にはならないわ。菫の顏色は濃艶とした中に、凛とした趣があつて、頸をかしげた所に、得も云れぬ嬌態があると、誰やらが賞めたのを、聞えぬふりして、聞いた時には、ほむとに身のうちが、ゾク〱してよ。……雨さへ降らなければ、この頃の陽氣ではあり、今日の日曜には、澤山人出があらう、今を盛りと咲て居る、妾の姿を見ては、屹度誰も足を止めて賞めるに違いはない、仕合がよければあの茜色のリボンをして居る、美い令孃の手にも摘まる事もあらうと、樂むで居たのに、何と云ふにくらしい雨だろう。アラ、また意地のわるい風奴までが、雨の手傳をして、吹て來たよ。そむなに邪險にすると妾の頸がきれるよ、ほむとにいやになッて仕舞ちやありませんか。』と菫がヂレッタ相にコボした時、灰色の雲の斷れ目から、お日様が顏を半分ほど出して『菫さん大層怒ていらッしやることね、あなたがあんまり御人がよさ過ぎるから、雨の奴が馬鹿にして、イジメルのよ。これから、雨の奴が親切相なことを云ても、取合はぬ様になさいね。わたしと仲よくさへして居れば、あなたの御容色も褪せることなく、人さんもわたしの温かい光がさせば、浮かれ出て來て、あなたを見て嘸ぞ賞めることでせうよ。』と。やさしく申しましたものだから、菫はツイ小い量見から、お日様の言葉をしみ〲うれしく思いまして、それからと申しますものは、雨が時々やつて參りまして、『菫さん遊ばないか』と申しますと、菫はいつも『いやなことよ、あなたはひどいもの』と申しまして、毎日々々お日様と遊むで居るうちに、段々に自分が生いて居る、地面は乾いて、所々に裂目が出來まして、根は浮き上がて、葉は黄色になりまして、さしも自慢の顏色と誇りました、花の色さへ褪せて見るかげもなくなりました。其處へ雨が參りまして『菫さん、あなたは、わたしを大層お嫌いなされて、御日様と毎日一緒に遊て御出でしたから、そむなになりましたのよ。全體あなたを、罌粟粒よりも少さいうちから御育てして、御綺麗自慢をなさるゝまでにしてあげたのは、誰ですね。お日様とわたしでせう。それをあなたはとかく、お日様の温い光にのみ目がくれて、わたしのなさけある潤ひを御嫌いなさるゝが、夫れてはいけませんよ。勿論あなたばかりてなく、世間の人たちも、自分が立派になると、生育の恩を忘れて、目上のものの躾や、朋友の忠告などには、耳も傾けないで、自分の榮華にあこがれて、なま温い方へのみ、近寄りますが、そういふ人達は、みな仕舞にはあなたの樣になりますよ。』と申しました。菫は心から自分が惡かッたと思ひましたものと見えまして『雨さんどうぞ、勘忍して頂戴、妾が惡う御座いました』と申しました時には、其からびたる眼からは、涙がいッぱい溢れて居りました。菫はお日様へも、今迄自分が雨の恩を忘れて居たことを話して、改心の次第を申しますと、お日様も大層菫の心掛のよいのを感心しまして、その後は、お日様とも仲よく遊び、また、五日目には一ぺむ、きッと雨とも遊ぶこととしました、夫からと申しますものは。菫は段々元氣を恢復まして、自慢の花の色自慢の頸の嬌態、ものと通り、さえ〲しまして、今も公園の榎の木の下に、無限の教訓を語てゐます。

野鶉

野口雨情

東に九つ
西に
六つ
畑に隱れた
野の鶉
此處來い〱
鳴いてゐる

畑に
桑の實
野に鶉
酒屋て水汲む
刎釣瓶
ぎり〱ぎッたん
ぎりぎッたん

お日さま
暮れたに
雑鍛の
田鼠になられた
野の鶉
此處來い〱
鳴いてゐる

人の噂

伊藤つる子

都のかたほとり小石川の白山といへは追分の其又おくにして、きつれたぬきのたぐひ夜ひるそこらさまよひあるくやと覺燈の光まばゆき下町人はおほすべし、まことや八百八町も千六百十六町と年々に廣まりゆく御代の光のめでたさは、三館の自働車はた〲と砂をけたてゝ門の外すぐれども、何事とあはたゞしう立いでゝ見るうなゐもこゝらにだに無くなりにけり

白山の森をうしろに向ヶ岡の二本杉を自からの庭の眺にたてなしたる一かまへ羞仁守垣の新らしきがあなたに若杉の植込み見へて、自然木の門柱に坂田富とのみ、扇はきの老僕より外絶えて人の氣なきがあやしきと、三河屋の用きゝが書生をとらへての噂とぞ

一日わかきはしための使にやりたるがかへり來て、かへり路はさし匿きて、坂田様の御門に黒ぬりの馬車とどまりて車の中に人かけはせて、あたりの女子供道をふたげてかしましうのゝしりあひたり、何事にはべるらむといとみたけに云ふ、さはかりゆかしき車の中の人ならば、拜みても來よかしといへば、耻かしげにほほ咲みしかと盛をたつやがてつと走りゆくけはひす、今朝はいつになう門までのはしきの目いと淸らにつきて侍りしかば、よきまらうどなどや御出しつらむ、ゆかしげもなき砂をと年老たるはつぶやくめり

いつこにか異りたるあやしさなどそ有るべき、大御城はなれたる小石川の果なりとて、黒ぬりの馬車珍らしきにも非ず、あたりの家けおさるゝ許りのよき家居にも、はた數寄たる趣おのづから道ゆく人の目をとゞめしむるとにも、あらざめるを、いかなればにかと心とむるとにあらで朝夕のそゞろありきにふと其門すぐる折り、しか思出らるゝなり

夕餉終へてのそゞろありきに例の羞仁守垣ににそひて曲がるとて、若きはしためか注進の馬車いうちの、ひげうるはしう細望かなる殿様風の人の上思出られつ、いまゝかのきずなも人に求めらるゝ高き際の人のしのびて思ひ給ふ人ありてわざとかゝるあたりにかくしもたるにはあらじか、さらずは市中の譏者の人につげ難き病などのありて、かく人はなれたる住居に身を隱くにはあらじかなど、ゆかりも無き人の上のなにとなく心にかゝるもあやしかりけり

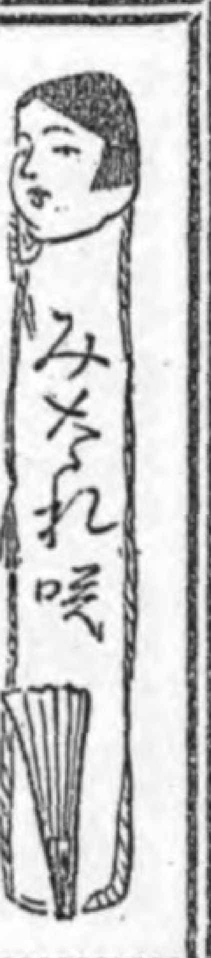
めつらしうなにがし博士の今宵訪ひ來ますとありしたむ守にしてはと急ぎ屈にみ社の廣庭をすぎて長き石の坂にかゝる折しも夕ぐれの人のゆきゝ繁き前町を横ぎりて新らしき車二臺、あとなるは供の人らしうまるまげの四十女なり、道ゆく人の男も女も云ひあはせたらむさまふつとかへりみたるに雪なす羽毛のショールをもろゝ脳髀のかをりのそれならで夜めにもしるき眉のにほひ目のすゞしさのそれにもあらず、よそ人は如何にとも思ひかへり路のいそぎあしをとゞめてわがかへりみたるはかばかり美くしき人の上に異様なる物がたりを聞にしもあないたはしと心よりあはれさの堪かたかりしなりけり

あはれ〱犬よそ人の世にうまれいてたらむ人の、何事をいたはしさのかぎりとは云はむ、幸なさの極とは云はむ、あした夕な黄金の床に錦の衣かされきて、思ふところ云ふ所なに心にもどかしとするところなくとも、五感の中一つだにかけたらんには山なすこがねも何かせむ、まはゆき錦も要なかるべし、まして啞と云ふ病は一つならず二つまでも取かされたるかたはなきにこそ、いたましとも云はむかたなかるべし、幾萬の聽衆を一堂にあつめて物な說く辯者も時ありては心の思をそのまゝに人に傳へむ言の葉なくてひとり心にもだゆる折もあめるを、唯一言父とも母とも得うちいでさる心の中思ひやらむさへぞかたき、空にひゞくひばりのうた、まがきにすだく虫の聲な春秋にきゝゐてこそ世のうさも慰むものなるを、我身ふなにと云ふものぞとや犬とも猫ともきゝわかざらむにはなにの興ありてか世にいきむ、されどあやにくに形なき心と云ふものゝみは同じやうに網しさも悲しさも思ひわくらむにこそされば千里をへだてゝ文も通はぬ海のあなたに戀しき人をやりて、生きての世に再び相みむよすがたもなくて、たゞ天つちにわれひとり思ひ一人嘆くにや似たる可き、まして子には心もやみになりぬべき親の、まるかたわの子を持たる心の中を思ひやるには木石ならぬかぎりのもの、誰かは目をばぬぐはさらむ、双の手の指うこかして彼の聾みかへりたるは何事をおもひいてゝ語りたりけむ、供なる人もいかに苦しかりけむかし

盲啞學校といひてさるあはれの人々には大なだに救ひの舟の現はれたらむ樣にて白山のあなた植物園に向ひて立てられたる學びやあり、されば朝夕のゆきゝにさるたぐひの人に出てあはむもまれにはあらぬたいときばかり悲しくも思ひやられぬをかの車上のうるはしき人をみては如何なればかう同情のよせらるゝにか、ふかきちぎりの有るなるべしなど、自らとひつ答へつして立歸れば、まらうとがおかしき物語りに夜を更かして今朝までは思出ざりけりみやこわらべの口さがなさは甲より乙に乙より丙にといかなる家のひめ事もまたたくひまに知れわたりぬるこそうたてけれ、今は此町内に坂田様の姫君の事知らぬ人もなきにまだしろしめさでか、某の有名の家の姫君の故ありてしのびて盲啞學校に通ひ給はむとて乳ままゐらせたる女のわがかくれがのやうにして日毎まなびやに送りむかへすると確かなる人の申し侍りしを、と、一日許りして若きが語る、玉のやうに淸らに御座しますなわかみ館にすみかたき事のいてきたればとなむさる人の噂しはべりきとさすがあはれとは思ひこめり

あはれかうかくれなき事は如何はせむ定かにあはれなりけりとおもふにいとゞ坊かたくなむ今二日過ぎて口惡るき新聞紙の中はなを埋むべき事のさまかなと思へは開けたる世こそなか〱にうらみもおほくそふもの成りけるにや

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



指環と寶石

左門記

比斯馬克の鐵の指輪は隣國人の無頓着の紀念とか、西洋の女は之れを婚姻の約に用ふと云ひ、日本の掏摸は刄を仕込みて途行く人を惱ますと聞く。之れ等は各〻共に其用途あれど、單に飾りと云ふ點より見れば、其材料も從て多く、且つは主要の珠も先づダイアモンドの透明無色を第一とし、黄青之れに亞ぐ、鬼の目に似たるルビー、藍の澄みたるはサファイア、眞珠は金銀、オパール、エメラルドは共に萌黄なり。つまり金、銀、白金などの臺に好みの珠を塡むにありて以前は金臺に猫眼石の流行りしも、今は捨たりて顧る人もなしとなり。去る當世人の云ひけるは近頃指輪の流行漸く盛りとなり行きて、裏屋のお嬶さてはお鍋どの、米とぐ手にも鈍き光りのある事あれど、之れ等は大方銅か眞鍮に止まりて、銀と來るは先づ稀なれば問はず、之れより金銀白金臺に珠入りの分を話さんに、其珠は勿論ダイアモンドを首座として、亞ではルビー、エメラルド、サファイア、オバール等なれど、ルビー以下は人々によりて好惡のありて、また、流行りと捨りとあり。さて、これにも關はず始終不變に用ひらるゝは眞珠なるべし。眞珠は阿古屋貝の病なれば、天然產と人工によりて強て造らしむるとの別あり。概して天然產は質固く、光澤よろしとなり。天然眞珠を產するは要に太洋洲にて、潜水夫のする業なり。我等子供のとき、船來の小學讀本にて讀みたる事あり、潜水夫は小舟より一本の綱をたよりに幾尋の海底に下り、腰に下げたる籠に貝を入れては上る苦るしき業にて、息の長さは十分間も海底に止まると云ふ。近時潜水器を用ふれども、動作の自由ならぬより、尙ほ舊式を守るもあり。さて、採りたる貝は土中に埋め、自然と死したるより索むるものなれど、之れとても値段のあるは百に一つが稍くにて、價の高きは定法なれば、慾に限りのなき人間は、こゝに人工にて強て貝に之れを造らしむるに至れり。こは、貝を採りて無理に口を開け、砂粒か、何かを其のマントル(貝のひだ呼吸器の一部)の間に挾み、再び海に入れ置けば、貝は其刺激を療せんと、己が體より一種の粘液を分泌して、此砂粒に何時とはなしに被覆物を造る。此物即ち眞珠にて、光の好惡により價を定む、此法とても今は段々と進歩して、最初より刺激物に形を造れば、菩薩の御像もありとか傳ふ。又、別に貝殼の內面に凸起を生ぜしめて切り取る法もありと云へど、審しくは知らず。かくて、採りたる眞珠は粒を選りて飾に用ひ、性の惡きは目藥とす。我邦何時の頃よりか、又、如何にしてか言ひ傳へけん、眞珠は眼中の塵を吸ひ取ると云へど、こは、何にかの間違ひなるべきか。茲に、又ダイアモンドにつきて云はんに、其產地は誰も知る南阿比利加を要なるものとす。かの、トランスバールにても之れさへなくば戰爭も起らず。從てチャムバーレン氏も心を痛めざりしならんに、さても、恐ろしきものかな。月珠の昔は知らず、近時我邦も戰勝後、人心の漸く驕るにつき、人は衣服の美のみにては滿足せず尙も、其指、其頭、其胸を輝かさんとや、三井、白木屋を訪ひたる後は、必ず天賞堂か玉寶堂へ向ふなり。さて、其好みも人によりて異なれど、要するに、東京人は淡くして意匠に凝りたるを貴び、上方人は濃くしつこきを賞美す、况して夏場の用としては、指輪にせよ、ブローチにせよ、將た、簪にせよ、臺の細き透し彫りを好むは東京人の常なれど、上方人は臺の目方に重きを置く、例へば、臺の金が何匁で、珠が何圓、合計して何程と萬事算盤高しと知るべし。さらば、上方にてはあまり賣れぬかと見れば、比較的東京より多しとの事に、不思議と聞けば、こは男の多く用ふる爲と答ふれども、眞僞は知らず。また、昨今如何なるが流行すると聞くに、前に云ふルビー以下の色物は多く珍重せられずして、何んでも無色のダイアモンドに向ふが如し。されど、我邦に輸入せらるゝは、品質概して下等にて、無瑕の上物に至りては容易に手に入らず、また、海關稅も騰貴したれば、價の高きは愕く程にて一寸したのが千圓前後、此上は際限なしと云ふ。

紀の殿の御前に仕ふ奉る
よの子のもとに

弓屋倭文子

卯花の陰に隱れたる聲、待ちつけにし事も、五月雨と、共にふり過ぎて侍るかな。この程にまうのぼり給ひけん後も、とこよものゝとこしへに仕う奉り給ふよ、なり〳〵、同じ風のたより承は、嬉しうなん。早くは、初めて對面給はりつる喜びは、いはん方なきものから、あまりにまつびまゐらせんも、いかにぞや、かたはらいたくて、事ども、聞えさすやうにて、別れ奉りしかば、暗の現にもまさりて、名殘りおほく殘おほく思ひ給へられ侍る。なほ、のたまひつる事のまゝに、今よりは、忝き身をも思しやりて、いふがひなき御おとうとゝも思し給はさんは、なにの喜びかまさり侍らん、世の常の事をも、まだえ辨へ侍らず、何事もあへなうなり侍るを、事にふれつゝ、浦回のよしあし、敎へ給はせんもの、と賴もしうなん。まづこそ、その折は、たかしき御送り物を老いて侍るものも、かへし〳〵めて與うて喜び侍り、いやはつゝましければ、なか〳〵にてやみぬ。かなたの御消息おはしなば、いろはの君へ、いともよく傳へまゐり給ひなんや、いかて花野の露をも、御諸共にわけ侍らば、よに心ゆく秋にこそ侍らめ、いつばかり御里へはまかて給ひなん、かれて承らばや、こゝになやましうしつるも、今は心凉しうてなん、御心安く思し給はせよかし、あなかしこ。

カセムの古靴

青葉薫

昔バグダットの町に、アボン、カセムと云ふて一人の年老いた商人が住んでゐた。其身代のいゝことも評判なものであつたが、吝嗇漢だといふので、一層よく人に知られてゐた。カセムの金庫は外見は小さいもので、――若し萬一見る事ができたとして――又隨分穢いものであつたが、その中は結構な金銀寶玉で、一杯になつてゐた。服裝も至つて粗末で、僅に膚をつゝみ寒暑を凌ぐといふにすぎなかつたが、それでも身につけてゐる、現金と垢とは大したものであつた。衣裝の飾と云つたら、眞に是れ襤褸の錦で、骨立つた身體中に、つぎはぎの小布をいくつとなく無造作に纒ひつけてゐるといつてもよからう。頭巾ときたら保存のいゝことては第一等といふ質のあらひ麻布で、而も原色も見わけかねる程に、汚れてゐると云ふ代物すべてが斯うお粗末づくめであるに拘らず、カセムの靴ときたら、それこそ何よりも第一に好古家の研究に値するものである。

蓋しこの古靴たるや、カセムの身體の最極點を蔽ひ包むもので、而も亦同時に、カセムの不潔の最極點を示すものであつた。靴底は大抵大釘で張りつめ、上皮は殆ど天地覆藏間一切の物をあつめて、作りなしたといつても可い。昔黄金の羊皮を探し求めに出かけたと云ふ船とても恐くこれほど樣々の物を載せ集めては出かけなかつたらうと思はるゝ。この古靴が凡そ靴としてお役目を承つて來た十年の間にはこの上もない手きゝの靴工が、あらん限り、一世一代の智慧をしぼりあらん限り一世一代の技倆をみがいて、其破れをつなぎとめたものだ。

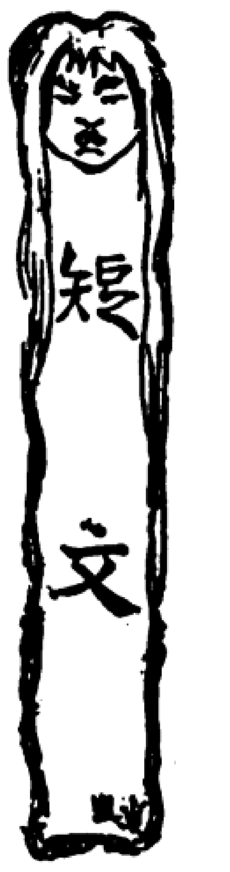
凡そ樣々の材料をよせ集めたといつたら、夥多しいもので、又其重苦しいときたら大したもので名譽とも何とも、カセムの靴と云へば世間の諺になつてゐた。其證據として凡そ世上で物の重すぎると云ふに就いて談が出ればいつでも「カセムの古靴の樣だ」と云つて比べものにせられるのであつた。

或る日のことである、此の豪商アボン、カセム氏は、バグダットの市場を彼方此方と歩き廻つてゐたところ、ふとある商人に、上等の硝子瓶が夥多あるが、一つこれ〳〵の値段で買ひ受けて貰ひたいといふ相談を掛けられた。初手からこれは極安で大に利得があるとみた上に尙も値切てみると相手は手もなく承知したので、カセムは悉皆右の硝子瓶を買ひ込んだ。するとその商人がいふには、實は一人の香水商が近頃破產して大いに困窮してゐるところから薔薇の香水を大安賣に賣飛したいと云つてゐるといふのである。そこでカセムは、それは何よりも耳寄な話だといふので大嬉び大急ぎで、其香水屋の店へ行き並の半値段で以つて悉皆件の薔薇の香水を買ひ占め、自分の家へ運ばして、前に買つた瓶の中へ一つ一つ香水を入れてしまひさて何しろ、是は好い商賣をしたものだといふので、大浮れて以て、然かといつて、心祝ひの酒宴でも張るかと云ふと、其處は仲々さすがに此連中の考へは又違つたもので、近頃暫く御無沙汰をしてゐた、湯屋へと出かけた、さて綴り合した襤褸の衣を叮嚀に一つ一つ解いてゐると、カセムの友だち――吝嗇漢に友だちのあつた例は稀だが、少くともカセム自身では友だちだと信じてゐる――が側へ寄つてきて、

「これカセム、貴樣は知るまいが、貴樣はあのと(庭に脫いてある古靴を指しながら)古靴のおかげで町中の胡盧のたねとなつてゐるぜ。もう大抵にして新規に買つても好い頃だ。」

【未完】

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



▲脊戸の婆さむ　　土佐　廣瀬春子

裏の柿の木で蟬が鳴く。脊戸の婆さむ杓子振る。廿歳息子の太郎作殿。婆が四十の三月に。殿の御供て江戸へ行き。其夏時疫で死んだげな。杓子に枳殻を結ひつけて。目出度歸國を待ち申すと。大な聲て招いたりや。旅人たあ無事に歸るとか。太郎作殿が植ゑたといふ。婆さむ所の柿の木は。廻りが大きくて登られない。婆さむわしのぢ様と同い年。ぢ様はことし八十だ。ぢ様は耳が金聾。ばあさむ白髪が十筋ほど。藥鑵頭で目が見えぬ。口て何にやらいふけれど。わし等が耳には聽えない。蟬の鳴かない日はあれど。婆さん杓子を振らぬ日はない。

選者曰　燒野の雉子、夜の鶴

▲京女郎　　東京　鳴瀬つゆ子

闇を前栽の蔭に殘して、空には十六夜の月さやかに、池の面に浮べる荷葉の數もまさるべく、軒端の風鈴に音づる風膚にくからで、いと心ゆく夕なりき。縁の襟は、あけ放したる縁側の障子にもたれ、腕拱ぬきて默想に耽けらせ給ひけるが、「太郎」もこよ、「花」もこよと呼ばせ給ひぬ。縁様平常の莞爾なる御顔ならで、いと御眞面目に仰せられけるは、おのれ年若かりける程、四京なるさる御屋敷に仕へまつりき。その頃よ、お頭世は刈込と亂れて、くぬち騷がしく、長き大刀佩き、短き袴つけたる浪人といふもの、都の中に入り込みて、天誅といふこと、夜な夜な行はれぬ。生々しき首の血汐まだ乾ぬが、蒼さめたる顔に、眼瞋と見開きたる儘、そこの磧、かしこの辻などに梟けられたることとも屢なりけり。月黒く小雨そぼ降る夕などは、其あたりより青き火燃え出て、ありし世の姿にて呻くを、見たり聞きたりなんどいふものさへありければ、毛蟲にも絕え入るといふなる京女郎の、夜に入りて後は外の往來はもとより勝手元にも獨りにてはえ行かで、恐れ慄ひて居たりしが、かゝること度重なるにつれて、いつしか昨夜もそこに天誅ありたり、かしこに獸門かゝれりなど唱へて、年若き女子供等さながら物見遊山にても行くが如くに、手を携へて見物する様になりたり。ひとり恐怖の情のみかは、馴れては惡を惡とも思はず、恥を恥とも感ぜで、あらぬ道に踏み迷ふこと世の人の常なれば、心してよと。……とのたまひし時、月影低く雲に迷ひて、餌を追ふ鯉の、「ザムブ」とばかり眠れかへれば、六になりける弟の「アレー」と叫びて、已が肩に取りすがれば、われも思はず縁様の御肩に。

選者曰　この縁様の經歷こそ聞かまほしけれ

▲奥津城　　東京　花輪餘志野

けふしも思ふとありて去年の愛國婦人をとりいでて讀む折しも、ふと目にふれしは、第百一號中故五百子女史の遊說日誌(三)なり、亡き人のなつかしうてよむともなく見るうち、いひしらぬ感情にとぢられ、そゞろ涙もよほしぬ、去年二月の頃にはかく健やかに東奔西走、雨にも風にも堪へ給ひしものを、一歳の後にはよべど答へぬ奥津城の主となり給ふべしとは實に思ひかけきや、あゝはかなきは人の肉體、恨み多きは無常の風よ。

選者曰　同感

▲團欒　　福岡　松村すが子

お父さんけふはお母さんと一緒なといと嬉しさうに庭よりかけ來りしは、いたいけ盛りの吉坊、思へば病床にありし事一月餘り、あはや消え果つるかと危ぶみし病も存外早く全快して、親子三人まとゐして夕餉の膳に向ふ嬉しさ樂しさ、今更ながら良人のみとりの恩なりしありがたさに、思はず涙はしぐまれぬ。

故中島女史　　三宅龍子

故萩の舍中島歌子刀自の遺稿編纂すべく遺言をうけてより、家の業にも、病のためにも、妨たげられて、思ひの外の年月を經にけるかな、同門の人々のもどかしうおぼすらむなど、罪ふかうおぼえて、例の少し暑にむかへば病もしぞきがちなるこの程、手箱とり出てゝ、くりかへしつゝ立どもおぼつかなき筆にかきうつすに、當季のは、ことにおもむきふかうおぼえられて、三つ四つかきぬきぬ。

菖蒲

なかき根はいふ人もなし花あやめ
はなにのみなるよにこそありけれ

三宅花圃女史選

田家梅雨

小山田にをり立つ賤もいとまえて
さみたれ髮やくしけつるらむ

水邊螢

わか門の川そひうつ木ちりはてゝ
やみになるよをほたるとふなり

竹風夜涼

一めくりすゝみてをこむくれわたる
かとのたけ村かせ立ちにけり

天　　深瀬ます子

時のまに星は出にけり身をよせし
やなきの絲にたまをつらねて

何か空想に耽るらむ少女のさまみるやうなり

地　　中村八重子

つみためし花籠をうけていさゝ川
うはかあやまちなかし行くかな

側に立つ子の面わも言外に躍せり

人　　大森とし子

さしていはすくれなゐふかき花さうひ
留守居の媼にたゝわたしける

佳調　　深瀬ます子

もしもわれ花と咲きなは月見草
よな〳〵月に立ちつくさまし

同

春の蝶はなと花とにあるましき
うらみなおひそ物さゝやきて

長　ゆき子

ほとゝきす初音きかむと夜こと〳〵
まとのほとりに床しめてまつ

福田いく代子

折かきすいはれつゝしにみたれちる
わか葉のつゆのこゝろよきかな

保原みれ子

遠山はもやにかくれて里つゝき
みとりかこめる草ふきの家

鎌田妙子

いつとなく夏は來にけり山里は
あを葉かくれの花もみゆれと

田口瑤子

風きよき木かけにちこをいこはせて
さなへとるらし里のしつの女

同

梅にのみきくものとして鶯の
わか葉になくはしる人もなし

牧せむ子

稽古かへりさくらなかれし里川に
そとうつし見しかけはわかかりし

城野とし子

さみたれに小田のむきの穗埋たちて
あめあししけし里の田の面は

角倉しめの子

すきてゆくすけかさとめて歌一つ
しひても見たき靑葉かけかな

長田きみ子

めてられしこゑもすかれて谷かけに
わひしさうたふみやまうくひす

わか葉のつゆ

とよ子

ゆふべのほしのまはたきをヂーツ見てゐるうちになんだかいふ事も出來ないやうな心地になつてセイ〳〵してサヨ〳〵私の家か御殿玉樓であの氣眼をいれた天井の下に住んでゐるやうな氣がしましたナニヨ三間許りの家に起きたり臥たりしてゐるかとて心までがせまくなるものでもなしこんなよい住居の中の一部の部屋だとも思はれるではないかと一人でほゝ笑んでる時に白色電氣かと見まかふやうな月が向ふの家の瓦をてらして出ました

らく子

子供の時分にコレナニアレナニと聞いては智識をひろめてもまだ中に人にいはないで心中にくりかへす疑問はいぢらしいほどあるものですナゼお祖母さんは皺がよつてゐるだらうとうたがはしいさに聞いて見るとそれは年をとつたからと無造作な答もよく解せた積てナル程と合點してある時庭木の松の幹を撫で松もとしを取つたヲネこんなにお皺だらけになつてゐる

つた子

ロタ〳〵あるきの子の足の上へ甕を落して痛タイーヨとなくを制してコレ〳〵と菓子器より菓子を取つてやりしに翌日みづから其甕を足の上へソト落してナニカ頂戴なと得意げなり

つた子

江の島の海へ鯨がよつた時は漁師は總出で取つたさうなといへば五ツになるがソウデッてクヂラのやうな道具なの?

よの子

ながるゝ水は濁らずとかや人も暫時なりともたゞ手を空しくしてすごさぬやうにありたきなりあるく謝には座てもつくなどいふ何か動けは動くだけの事はあるのを少しなりとも善事に與さむやうは心掛けむには其得る所いか許ならむ人一日の空時間は暇なしといふものすらなほ幾分かは有るなれどそのうち少しは休養り時におきてもなほあまれるものをぬき糸つなぐにも小裂よるにも毛糸あむにもはたきの紙をこしらへるにも用ゐてんにはさこそ益多からめ今の世の女は繼續に讀みふけれどもかゝる力の心得は皆無なりと老人達のいひけるとかや

○緑のかげ　　人見京明

そこはかとなく　惱ましき
頸なる傷に　たへかれて、
わだなただよぶ　朽舟の
沈むがごとく　迷ひてし、
みどり夢みる　夕だれの
森のにほいに　涙しぬ。
天と地なる　ふたなさけ
かたみにあつく　擁きしめて、
ふとしもはずむ　息つきに
まほろし流れて　香となりて、
滴るふりの　けだかさや
時の手力　くだつごと。
ゆたにまどろむ　森の梢の
きえせぬ力　やはらかに、
にほいぬ、いまし　木によれば
あふるる戯の　根力は、
こころのうちに　流れきて
鎮の痛みを　甦しけり。
森の力に　崩えいづる
みどりの影に　はぐくみし、
あつき自然の　うろほひは
生ひゆくままに　さはりなく、
憂ひの日頃を　ほろほしぬ
かくて胸の芽　ほのほのと
さきの日ふかく　培かひし
戀の果もまたく　朽ちぬれば、
時のあらぺる　手力に
とほく離りぬ　斷にひとり、
みどりにうるむ　香をかぎて
ああただながく　生るやう――

佗びしさ

なごり匂ひとめもせて　胸をはなれし魂の
影さへ見せぬ佗ひしさに　心の糧もおとろへぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

天下無雙の女學雜誌

女學世界

六月五日發行 第八號 正價廿錢 郵税二錢

●日本の風俗觀察 英人マーシャルフエルト、
▲女子健全法 下田次郎
▲愛情と嫉妬 三輪田元道
▲在米修學談 北村みな
△宮仕せし婦人談 △梅雨中の家庭 △季節魚料理廿種 △西洋菓子製造法 △患者に與る食物 △メリケン針の話
●上京女學生に對する注意 下田歌子
▲お轉婆日記 小式部
▲妾の愛兒 野口米次郎夫人
▲女代診 糸左近
△老いたる鶯(小說) △若き妻(小說) △おのが罪(小說) △支那の芝居… △市中看護隊の話 △衞生顧問外數項

○本誌前金 ○四冊七十五錢 ●八冊(半ヶ年分)一圓四十五錢 ●十六冊(一ヶ年分)二圓八十錢 ●外要郵税

天下諸孃の耳目悉く本誌に集る

少女世界

六月一日發行 第八號 正價十錢 郵税一錢

●口繪 ●杜鵑花(彩色) ●梅雨(彩色)
▲赤リボン(巖谷小波)
▲馬士の娘(生田葵山)
▲鏡御殿(武田櫻桃)
▲金魚のお使(與謝野晶子)
▲漁夫の娘(海賀變哲)
●わか友 ●愛らしき集會 ●繭撰り ●をしへの庭等
▽冒險小說女俠娘▽ ▽羊飼と小兒と狼▽ ▽杜鵑花と其描法▽ ▽絹糸編ハート袋▽ ▽家事のおけいこ▽ ▽庚申薮の作り方▽ ▽羽二重きぬの話▽ ▽少女リボン遊び▽ ▽ジャンヌダアク▽ ▽繪直し當選披露▽
●本號には大懸賞募集用箋を附せり

○前金八冊(半ヶ年分)七十五錢 ○十六冊(一ヶ年分)一圓四十錢 ○外郵税

東京博文館本町

ムスク香水

(大瓶壹圓●中瓶六拾五錢●小瓶二十五錢)

○本品は芳香の永く保つ點に於て無類の高評なり

東京日本橋區本石町四丁目 ホーサン石鹼本舖
本舖 松澤常吉 (電話本局百四拾五番)

資本金千八百萬圓

東京京橋區木挽町 株式會社 十五銀行 電話新橋 三〇〇番 一五三〇番 一九三三番

同日本橋區新乘物町 同 日本橋支店 電話浪花 一九〇一番 三二七四番 三五〇八番

一定期預金 六ヶ月以上年五分
一當座預金 日步七厘以下
一特別當座預金 同 壹錢

東京市日本橋區小舟町三丁目 株式會社 第三銀行 電話浪花四四二番 浪花四五一番

預金利子
定期預金 六ヶ月年五分
當坐預金 百圓ニ付日歩 八厘
別口當坐 同日歩 壹錢
全國送金每手數料
其他銀行一般の業務亦便宜取扱可申候

家政百箇條

(五版)

此書は本會が多年の經驗を積みて一般家政上の法則となるべき事ども百箇條三百六十七項を一冊にまとめ婦人達をして能く家政の法則を心得て家を齊へしめんが爲に發行せるものなり定價拾貳錢(郵送料を要せず)郵便切手代用苦しからず

東京市麹町區下二番町三七 大日本女學會 電話番町千三百三十番

(發行)

既刊 愛國叢書出版廣告

主婦の職分

第壹編

表裝は色刷にして美麗、印刷の鮮明なる、ふり假名の丁寧なる、よき本なり

目次大要

家庭革新の目的(子爵渡邊國武) 女子と國家の關係(文學博士村上專精) 主婦の資格(子爵松平正直) 社會的禮儀(女子高等師範學校教授佐方鎭子) 家庭の秩序(成女學校長嘉悦孝子) 日本民族適合の家庭(三輪田眞佐子) 家族制と別居制(海老名彈正) 同居制と別居制(本多貞子) 人生の至樂(文學博士前田慧雲) 女子年中行事(東京美術學校長正木直彦) 女子と美術心(伯爵松方正義) 園藝趣味の養成(伯爵酒井忠興) 家庭音樂(前東京音樂學校長大島義修) 用意(小浦鏡子) 小事(下瀨勝千代) 自他の樂(仁尾繁子) 下女の使用(松井悦子) 儉約(江木栄子) 金錢の使い方(コーツ夫人) 買物(有島幸子) 家計費目の割合(吳秀聽) 家庭(子爵加納久宜) 英國の家庭教育(下田歌子) 米國婦人の經濟思想(小崎千代) 東西婦人の比較(法學博士添田壽一) 英國と日本の家庭(岡田幸吉) 日米の家庭(安部磯雄)等其の重なるものにして實に主婦の室典(有益)として無比の書なり

▲實價金貳拾錢

郵送料は當方に於て支辨の事

東京市九段牛ヶ淵公園愛國婦人會内
愛國婦人發行所

全國女學校教員間に最も好評判は本誌也

婦人世界

六月一日發行 二卷第七號 一冊拾五錢 郵税書ヵ錢厘 六冊郵税共九拾錢

◎私のヒステリー全治實驗(稻垣輝子)
▲(口繪)山内侯爵夫人◎女學校卒業生◎新婚◎令孃等
◎感心せる奥樣(跡見李子)
◎子供の我儘は如何に矯むるか(藤崎)
◎朝飯料理(弦齋夫人)
△味噌汁は如何に作るか △パンは如何に食するか
◎娘時代の生活法…見よ左の大文字を…(村井弦齋)
△女は如何にして男子を研究すべきか
△自由交際は如何にすべきか
◎爪を見て人の性質を知る法 ◎小兒種痘の話(加藤照磨) ◎新流行夏衣裳
◎支那の結婚式(西澤好) ◎恐ろしき脚氣(伊庭) ◎感心せる(篠田) ◎少女欄(弦齋氏執筆大好評)
◎我兩親の健康長壽實驗(醫學博士山崎吉)

大改良の六月號

日本少年

▲面白く有益な懸賞當て字 ▲懸賞彩色繪葉書 ◎口繪

六月一日發行 二卷第六號 一冊拾錢 郵税五厘 六冊郵税共六拾錢 ◎郵券は一割増

面白き ◎舶來の螢 ◎蟹の鉄 お伽噺 ◎付髯太郎 ▲我社大園の會
◎冒險小說 絶島生活(新泉) ◎冒險實活 瀧の白龍(松美) 理科
◎眞珠(佐々木博士) ◎豌豆畑の會話 ◎螢は何故光るか ◎蠶を殺す虫(田中)
◎少年成功譚(貧家の子今は有名な實業家) ◎人足の少年今は鐵道王
◎作文 ◎和歌 ◎俳句 ◎投書 ◎博覽會 ◎珍奇動物

東京京橋南紺屋町十二番地 (電話新橋八七四番) 實業之日本社 振替貯金六番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

第四回新學期開始

文學講義錄

會員大募集 博覧會開會中入會金**全免**

●本會は下田棚橋津田諸女史の贊助に成り講師は皆斯道専門の大家也●會費最も低廉都合一ヶ月の遊學費にて本期を了はるを得

●中央新聞曰く講述何れも平易にして親切なれば初學の女子の講習には最も可なり。●報知新聞曰く天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有すると斯くの如きは稀れ也●都新聞曰く講義平明にして用意親切なり

父母の膝下に在て高等女學校全科を僅に二ヶ年で修了する事が出來ます講義は文部省令に據れるは勿論更に家庭の實用に適する科目を加へ丁寧懇切に講述します●規則書申込次第直に進呈すべし●

大日本淑女學會

東京神田區甲賀町十番地

ラクダ印麝香石鹸は高貴なる麝香に愛すべき「スミレ」の香料を多量に含むが故一度使用せば其香氣五日間馥郁としてかをりを失はざる一大特點を有す

定價 大形廿錢 小形十錢

東京日本橋區本石町三丁目
芳香藥種問屋 本舖 井上太兵衛

各女學校御用

シホン

附屬品幷に造花器械類一式

東京市日本橋區横山町一丁目十六番地
天野卯兵衛
電話(長)浪花一六四三番
振替貯金口座四九七〇番

營業目錄御入用なれば愛國婦人を見てと御書添へ御申越被下度候

○色白く艶をだす最良之化粧石鹸（大形廿錢小形拾錢）

松澤ホーサン石鹸

○到る所に販賣す（にせ物）あり松澤ホーサン石鹸と御買求を乞ふ

東京本石町四丁目
芳香藥種問屋
ムスク香水本舖
松澤常吉
（振替貯金四四七番）

婦女の讀物

本書の内容

●臺所の化學
●食物鑑別法

（臺所の化學）●臺所と人の生命…●食物と生理…●食物の料理…●食物の計算…●米飯と麥飯…●魚肉と牛肉及肉類と豆腐…●牛乳と卵、附豆汁…●味噌と醤油…●饂飩粉と米利堅粉…●茄子と大根…●胡麻と胡桃…●食後の果物…●燃料化學…●食器の化學…●腐敗及醱酵…●腐敗の豫防…●漬物の理及其應用…●納豆の製法…●果酒の製造…●

（食物鑑別法）●米の善惡 ●肉類の良否 ●鶏卵と牛乳の檢査 ●味噌と醤油 ●根菜類の選び方●葉菜方類及蔬菜類 ●蕈類 ●果實類及果酒 ●飲料水の選擇 ●食鹽の良否及改善法

主婦は勿論

川井甚平君
千葉敬止君　共著

家庭農藝

家庭農藝を知らんとするものは讀め

下婢も讀め

家庭の婦女は是非一讀せざる可らず

養蠶家及び養鶏家見よ

定價金四拾錢
郵税八錢

家庭の必讀

本書の内容

●園藝 ●養蠶 ●養鶏

（園藝）●園藝の分科……園藝と家庭……蔬菜類の栽培……大根と蕪菁……胡蘿蔔と牛蒡……玉葱と玉菜……茄子と胡瓜……蕃茄と秋葵……莢實類……落花生と玉蜀黍……サルシフイとセルリー……グースベリー及びカーラント……苺花壇の配合……草花の播種……移植の注意……花候と播種及び移植期……盆栽の注意

（養蠶）●養蠶は女性的事業なり○蠶の形態○蠶の發育○飼育の準備○蠶種及種類の選擇○催青及掃立○壯蠶飼育○飼育の一般注意○上簇○繭の處理法○製絲に於ける注意

（養鶏）●家事經濟と養鶏●女子教育と養鶏●鶏の種類と選定●家禽舍及運動場●飼料の定め方●煉餌の作り方●青菜と砂粒●產卵と季節避害と保護●育雛業及養鶩

發兌元　東京本郷區本郷一丁目　育成會

專賣特許

乙女くけ臺

●各女學校裁縫教授先生方より充分なる御試驗を受け女子裁縫實用器具として何れも非常なる御賞贊を蒙むりたり

定價 特製七拾五錢 竹印品切
松印四拾五錢 梅印品切

●小包料二個迄金八錢●

▲郵券代用一割增

▲取次販賣御望の方は特別に御相談申上候

製造發賣元 **堀口商店**
東京神田榮町十一

美顏料

色黒き人に告ぐ

肌を艶白たらしめんと欲せば牛乳浴牛乳浴に勝るは

香氣馥郁として香水匂袋の代用をなす

定價 小形十五錢 大形廿五錢 特五十錢

輸入元 東京神田久右衛門町 オーケー商會

合名會社 **森村銀行**

東京市日本橋區通一丁目
電話(特)本局六七三番
電話本局四九八番

定期預金 六ヶ月以上 年五分五厘
當座預金 百圓に付日歩 八厘
當座預金 同日歩 壹錢壹厘

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

各種美術工藝品ハ御注文ニ從ヒ
意匠製作共ニ入念ニ致シ專ラ誠
實ヲ旨トシテ御高需ニ應ジ申候
間何卒御愛顧ヲ奉願上候

東京市下谷區池之端仲町
玉寶堂

宮內省
御用達

飯塚伊兵衛

電話下谷 長九六五
一二四四

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ベルツ大博士の方劑

本邦唯一の美顔御料として『ベルツ、クリーム』に優るものありや？

今や滿天下の紳士貴婦人用として好評嘖々たり!!

此れ醫科大學前教授ベルツ大博士の方劑たる所以なり!!

消化新藥

胃腸障害は往々疾病誘發の根元となり、又疾病治癒の轉歸を遲鈍ならしむ、而して胃腸障害の內、澱粉不消化に因するもの甚だ多し。殊に米飯を常食とする本邦人に於て然りとす。之を救濟する一に完全なる澱粉消化藥あるのみ、此目的に向て、余は高峯博士の發見に係るタカヂアスターゼを使用し、好果を收め、此種の製劑中最優等のものたることを確信す

醫學博士　井上善次郎

高峯博士發見のタカヂアスターゼが唯一の澱粉消化藥として著大の効力を有することは業に既に世の定評あり今や予は其實驗に基きタカヂアスターゼが結核患者の消化障害に對する著效を確認すると共に此種患者に毎に之れが服用を勸告する者なり

醫學博士　栗本東明

家庭必讀 通俗倫理

高島平三郎君校閲　金子濱太郎著　（新刊）

四六判全一冊　定價貳拾五錢　郵税不要

◎本書は未來と云はず過去に拘らず現世に於て安心立命すべき最も進歩せる活動主義の倫理を言語體にて記述し且傍訓を附し例を日常の行爲にとり平易明瞭に然かも興味津々の文字を以て説明せるものなり普通教育あるもの之を讀まば啻に自己の修養に資するのみならず家庭を平和にし他人との交際を圓滿になすことを得べし

◎男女青年の煩悶者必ず之を讀め煩悶せざるものも亦讀まざるべからず

◎進で倫理を研究せんと欲する學生の爲めには指導となり然らざるものも日常行爲の光明とならん

發兌　東京神田小川町九　電話本局二四二〇番　振替口座四〇三二番　開發社

家庭に紹介せられたる二大必要品

其一　下山高橋兩博士指導製造

クレソール石鹼

定價　大　一個金拾五錢（罐入）　小　壹個金八錢

本品は傳染病豫防消毒並に皮膚病一切婦人病花柳病等に至大の效能を有するクレソール石鹼液（獨乙名リソール）を學理上より普通石鹼に加味したるものにして此クレソール石鹼は去る卅八年六月內務省令を以て傳染病消毒に有効なると證明せられたるものなり而して本石鹼の品質に至りては弊堂責任を負ふて原料を精適しあるを以てたとひ裝飾及び香氣に聊か缺くる所あるも良好なる事は已に定評のあるあり加ふるに本品はリソールと其効能等しきため醫學社會に好評を博しつゝあるものなり

其二　同上

洗濯用鹽水石鹼

定價　捧製　壹本金貳拾錢　型打　壹個金四錢（郵送料貳錢）

本品は家庭上必要缺くべからざる洗濯石鹼に改良を加へたるものなり在來の洗濯石鹼にありては海邊に沿ひたる水又は大陸及び山間等の硬水（キミヅ）にして多量の鹽分を含む惡質の水にありては其効能更になしと云ふも過言にあらざるなり然るに本品は二博士の指導の下に是等の弊を除き其名の如く鹽水は勿論如何なる惡質の水にても適する樣製造したるものにして其品質も亦舶來石鹼に遜色なきことを信ず

右二品は帝國大學教授藥學博士下山順一郎先生同醫學博士高橋順太郎先生の親しき指導の下に製造する所にして名聲高き愛國婦人の機關誌『愛國婦人』並に大日本女學會の『なでしこ』に於て家庭の必要品なることを紹介せられたるは弊堂の光榮とする所なり希くは普通商品と其選を異にせる事を諒せられ陸續御使用あらんことを

右二品は大日本女學會に於て取次ぎの勞を取らる、尚同會員方並に愛國婦人會員方に限りクレソール石鹼は左の如く割引の上御需めに應ず

東京市京橋區本町三丁目　三實堂

割引代價　クレソール石鹼

大	壹個金拾貳錢	郵送料	壹個　四錢	半打　拾五錢	壹打　貳拾錢
小	壹個金　六錢	郵送料	貳個迄　貳錢	半打　拾錢	壹打　拾五錢

東京市內は澤山にても郵送料四錢にて宜しく又洗濯石鹼は捧製よりも型打の方家庭の使用に都合宜しくクレソール石鹼も此頃小形のもの出來て便利なり

女鑑

本誌は國運の振暢に伴ひ第十七年第七號より大々的發展をなし從來記載せる物の外に家事に關する實用談を專門諸大家に乞ひ詞藻欄を擴張し讀者好個の文壇とすべし家事欄に於ては▲長與博士の胃腸の養生法▲楠田病院長の婦人衞生談▲高島平三郎氏の家庭心理▲村井弦齋氏の料理法▲吉松醫學士の育見法▲各專門家の和洋及支那料理法等文藝として再讀を經べき者は▲幸田露伴氏の小説▲佐々木信綱氏の美文▲鹽井雨江氏の韻文▲岩村男爵の美術談等、（毎月一回〇一日發行定價一册郵税共廿錢）

懸賞

兼題和歌選者　佐々木信綱氏
雜題和歌選者　本居文學博士
短文新詩選者　鹽井雨江氏
俳句選者　內藤鳴雪氏

〆切は前月十日着　◉七月迄の事委細本誌　和歌兼題△池邊納凉

六月號要目▼井上博士の女子修養談▼新渡戸博士の家庭に注文▼弘田博士の育見の注意▼呉博士の精神病患者▼細川博士の女子自立心▼本多博士の養鶏談▼高木博士の結婚式改良▼石井判事の女子の社會觀▼花涙女史の小説木下闇等記事豐富にして趣味津々

東京京橋區築地二丁目　國光社　電話新橋特八八〇二六九三

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

最新流行の洋傘

繻子地絞模様婦人用洋傘　一本六圓より七圓五十錢迄

洋傘に絞り模様を應用したるは我三越が數年の苦心に係る。これが爲に特に布立を織らせ、嶄新なる模様を絞らせて今回の新柄陳列會に出せし處、非常なる好評にて、其製造に間に合はざるほどなりし。絞り模様の特色は其極めて意氣なるにあり、されば園遊會などに之を用ゐんと態々御注文遊ばさる方數甚ぞ多く、三越が今や全力を揮ふて其製造に着手中なり。先づ〳〵試みに一本を購ひ給ひて之を御友達に誇りたまへ

三越呉服店發賣

夏季婦人の必要品

◉舶來縮地モスリン製婦人用シャツ　一枚八十錢より一圓廿錢迄

縮モスなれば肌ざわりのよき此上もなし。一度之を試みられなば亦忘るゝ能はざるべし。

◉シホン製夏向ショール　一枚四圓三十錢

薄きシホンにて製し間に天鵞絨の球を飛ばせたりレース製は二圓より三圓五十錢位なり。

◉束髪用櫛（セルロイド製）

夏季は束髪の輕快に限り申候、さて束髪用櫛の價は

一枚櫛（蒔繪）　三十錢以上八十錢位
一枚櫛（蒔繪に彫刻入）　五十錢以上一圓五十錢
二枚櫛（蒔繪）　四十錢以上一圓五十錢位
二枚櫛（蒔繪及彫刻入）　七十錢以上二圓五十錢位
三枚櫛（蒔繪）　一圓より三圓迄
三枚櫛（蒔繪及彫刻入）　一圓五十錢より四圓迄

夏衣裳を御調製遊さる御方は

三越呉服店發行の「夏衣裳」を見ざるべからず。

今般三越呉服店に於ては、夏衣裳御調製遊ばさる御方の便宜を計り極めて美麗なる夏衣裳及付屬品一切を圖解せる「夏衣裳」なる冊子を出版仕候。「愛國婦人」讀者諸氏には、御一報次第御一名一冊を限り無料御送呈可申上候。

三越呉服店發賣

最新流行の婦人用品

●バスタマック　一箱（八個入）　六十錢

入浴の際一個を浴槽に投ずれば得もいはれぬ芳しき香の泉と化す。香水の湯とは之をやいふらん。試みに一度八錢の御散財を遊はされよ。

◉眉墨　（巴里のピノー會社製）　一本十八錢以上

世界第一の香料會社ピノーの製品なれば品質精良。

◉筆齒磨　一本三十二錢

鉛筆の形を成せり。之を以て齒を磨けば直に汚物を取去り得る事容易なり。齒の衛生家の必要品。

三越呉服店發賣品

實用新案　タオル浴衣

大人用（一枚）　三圓三十錢より四圓二十錢
小兒用（一枚）　一圓五十錢より二圓五十錢

タオルにて製したる浴衣なり。入浴の際に着心よきは勿論の事にて、海水浴用として又は寢衣用として最も高評なり。本年の新製品としてかくの如く廣く行はるゝ者なし。今回小兒用として賣出したるものは、小供の寢衣として寢冷のせぬ効能ありとて、四方よりの御注文中々に多し。試みに一枚を御注文あれ。

新柄中形浴衣地陳列會

六月一日より開催

昨秋懸賞を以て募集せる圖案により染上げたる極めて嶄新なる柄合を始め、夏季向呉服、太物類、化粧品、旅行用具洋傘、履物等一式陳列販賣仕候間、續々御來店被下度候。

東京日本橋　三越呉服店

（振替貯金番號三〇〇番）

明治四十年六月五日發行（毎月五日廿日二回）（定價金三錢 一ヶ月六錢 郵税不要廣告料一行金六拾錢）　發行兼印刷人 山澤俊夫　編輯人 大久保高明　發行所 東京麹町區飯田町 愛國婦人發行所　印刷所 東京牛込區市ヶ谷加賀町 秀英舍工場

愛國婦人會記事

◉理事會及評議員會日取　六月分理事會及評議員會定日は左の如し
理事會　六月十二日（第二水曜）
評議員會　六月廿六日（第四水曜）

◉本部總會彙報

△離宮の拜觀　總會に就き上京せられし本會職員及び佩有功章者千餘名、去月二十一日午前九時より午後四時迄の間に於て濱離宮拜觀の光榮を得たり。

△橫須賀軍港拜觀　去月廿二日總會に附し上京せし本會員約二百名を限り軍港拜觀を許さる當日上村中將及令夫人其他多數の貴婦人は參觀人を鎮守府に迎へられ懇篤なる接待をされたり。本部よりは伊東元師夫人及鍋島前子爵夫人出張せらる神奈川支部に於て諸事準備上に甚だ配慮する處ありたり。

△支部長其他の招待會　次て二十二日午後より總裁殿下を始め有栖川宮妃殿下、東伏見宮妃殿下、山階宮妃殿下、久邇宮妃殿下の御臨場を仰ぎ偕行社に於て支部長其他を招待して晩餐會を催したり當日出席の諸氏は左の如し

●●支部長　中山笑子（栃木）、武田濱子（山梨）、川島澄子（滋賀）、大山德子（長野）、平岡夏子（福島）、笠井芳子（岩手）、西澤泉子（青森）、村上須磨子（石川）、寺田春子（岡山）、谷田美代子（德島）、小野田安子（香川）、安藤菊子（愛媛）、永井兼子（宮崎）、

●支部副長　泰靜子（長野）、黒田哲子（埼玉）、相良こそよ（群馬）、鈴木須磨子（千葉）、深町咲尾（栃木）、野崎すゞ子（静岡）、添田貞子（山梨）、帆足梅野子（岩手）、佐柳千代子（山形）、大久保つや子（秋田）、山崎兼子（同）、長寛子（石川）、

●海外委員部長　若松りう子（韓國木浦）

●評議員及幹事部長　廣岡淺子（大阪）、今村順子（三重）、川田信子（岐阜）、東郷須磨子（福井）、前田くみ子（富山）、三阪都留子（函館）、

●幹事　檜山夫人（茨城）、春日ゑつ子（宮城）、錦織りう子（熊本）、

以上の外會長、理事評議員の方々顧問等出席せられ、諸般の周旋を爲し十分の歡を極めたり。

○各支部主事々務打合會　去月總會の後廿三日午后一時より此度出京せる各支部主事を招集し事務打合會を開く、豫め各支部より打合會の議題となるべき意見を徵集し置きたるを以て之を印刷に付して各出席員に頒ちたり同日は各提出意見につき協議をなしたり當日伊東岡部清浦三顧問の來會傍聽せらるゝあり清浦顧問は本會の前途につき懇切に談話を試みられたり廿四日には岩倉會長岡部理事の臨席あり結了後質素なる晩餐を饗したり此打合會は各主事達が熱心に本會の爲に圖りて各地の情況等を詳述し又た前途の發展を企畫し懇切に本會に意見を提出して參考に供するなど最も本會の事業上益を與ふるところ多かりしを覺ゆ。

打合會出席者左の通り

臺灣支部事務員上田孫三郎、北海道同小池九一、東京支部主事清水警五郎、京都同八田一精、大阪支部事務員鮑岡鐵藏、神奈川支部同日比知周、兵庫支部主事飯見長材、長崎支部同後藤賀、[illegible] 鳥取、滋賀、和歌山の三支部及韓國委員本部は欠席せり

右の外長崎支部事務員村里常吉、茨城支部事務員小松島之助、三重支部事務員内藤剛、靜岡支部事務員小倉靖、山口支部事務員内藤十六郎、福岡支部事務員越智直己の六名は傍聽せり

◉總裁殿下山形支部御台臨

去にし五月二十六日午前八時五十五分總裁殿下山形支部總會に御台臨のため評議員長岡芳子等を從へさせられ上野驛御發車、奉送の人々左の如し

會長　岩倉久子
理事　鍋島榮子　谷玖滿子　島津田鶴子　代山内禎子代
監事　三井苞子代
評議員　井伊常子　阿部篤子　黒木百子　千家俊子　濱尾作子　原禮子　高木鍒子　中山幸子　柳谷千代子　佐藤猶子　菊池成子　三井すて子　三井てる子　三井ゑい子　仁杉歌子
顧問　島津忠濟代
會計監督　佐藤正
東京支部幹事　磯江規矩子　飯塚里子　飯島鶴子　石植愛子　吉村親子　清水はな子　齋藤勝子　中居みね子　丹野夏子　横幕武良子　杉本幸子　關万代子
福島支部幹事　松本とき子　佐賀支部會員　奥村敏子
事務長補助　高松鐵太郎　事務員　小池縫市　保田熊造　東京支部事務員　和久井久次

山形支部第二回總會御台臨のため同支部へ向はれたる　殿下の御一行は御出發の日即ち去月廿六日には午後五時三十七分福島驛に御到着遊ばされ支部長代其他數十名の奉迎者ありプラットホームにて御休憩の後直ちに人力車に召させられ警部長の御先導にて飯坂町歌水館といふ旅館に向はせられたり同町にても亦盛なる奉迎をなしたり二十七日には飯坂町會員の申出により、近傍の古跡等を御覽ありたり零時三十分御旅館を御出發あり福島町に向はせ給ふ此處にては既に山形縣知事等の出迎あり午後二時三十分福島驛御發車米澤驛にては多數の奉迎者あり山形に御到着あるや狼煙を打上げ全市の官民學校生徒等多數の御出迎あり御旅館山形ホテルに御到着ありしは午後六時三十分なり翌二十八日山形千歳公園式場に台臨あらせられ御諭旨を賜はる極めて靜肅に總會の式を擧行せられたり來會員の數四千五百餘人別に遺族廢兵の參列する者九百五十名ありたり二十九日午後十一時四十三分山形驛御發車奉送者は奉迎の時の如く極めて盛なりき午後四時四分福島驛に御到着夫より飯坂町の御旅館に入せられたるは午後五時三十分なりき飯坂町民は奉迎の時の如く狼煙を打上げ盛に歡迎の誠意を表せり三十日午後十一時知事代理の御先導にて御旅館御出發福島驛にては當日雨天にもかゝはらず官民學生等盛なる御見送をなし奉れり宇都宮驛にては中山茨木支部長等の御出迎あり大久保埼玉支部長は黒田副長等と共に大宮驛より浦和驛まで奉送す上野驛に御安着在せられたるは同日午後八時二十分なりき

本日　總裁殿下山形支部總會より御歸着あそばさるべきに付同刻上野驛に奉迎の爲め左の人々出場奉迎せり。

岩倉會長（代理）理事谷玖滿子　理事山内禎子（代理）監事三井苞子（代理）評議員松平八百子　評議員井伊常子（代理）評議員阿部篤子　評議員千家俊子　跡見花蹊　仁尾繁子　中山幸子　佐藤猶子　弘田ます子　古市幸子　片山龜子　東京支部幹事横幕むら子　秋間爲子　齋藤勝子　柘植愛子　中澤くめ代子　杉本幸子　馬島國子　寺井登代子　西川津以子　清水とく子　飯塚里子　中居美禰子　會計監督佐藤正　事務長補助高松鐵太郎　事務員小池縫市　香川國平　東京支部員石川正純、

◎富山支部遊說日記

富樫眞喜子

午前六時十二分梅田發の列車にて服部鶴岡兩事務員に送られ出發したり午後七時着富永井副長初め評議員幹事十數名山口縣屬外事務員數名に迎へらる當夜富山館に泊す

四月二十五日

午前九時五十分富山發の列車にて永井副長加藤岡田兩幹事山口縣屬橋本事務員同行氷見郡氷見町に赴けり高岡驛にて下車し長谷川幹事の出迎を受け一行は腕車を驅り途中松本幹事部長初め多數幹事の出迎にあひ時氷見町に着與一樓に投す松本顧問芝山郡長初め會員多數來訪森田會員大に斡旋の勞を取られたり午後二時より圓照寺に於て講話會開催聽衆千五百餘名さしもに廣き堂宇も殆んど立錐の餘地なきに至れり先つ長谷川幹事の紹介につれて自分講話し四時終れり尚芝山署長は勸誘演說を試みたり即時入會者十三名右閉會後故奥村女史の追悼會を同幹事支部にて營まれ數名の僧侶の讀經あり閉會せしは六時なりき

四月二十六日午前十一時旅館出發松本幹事部長芝山長谷川加藤岡田長谷川の諸幹事森田番匠の兩會員芝山署長氷見郡速川村に至り會場なる勝傳寺に着せしは十二時過ぐる頃なりし午後二時より開會聽衆約百五十餘名例の如く講話せしは四時頃なりき一同は直に會場を引上げ氷見町に歸り此處にて役員に別れ幹事部長芝山長谷川森田の四氏は伏木迄見送られたり一行は又もや腕車を驅て二里半餘の道程を進み出迎の幹事に誘はれ同町なる會場不遠寺に着せしは七時半なりき岡本町長長谷川德之氏（有志家）幹事部より出張の石黑事務員初め土山射水岡本萱島加藤六浦の諸幹事幹事部事業部評總員二十三名出迎はる八時二十分より講話開始聽衆七百餘名例の如く講話を了したるは十時半なりき其より幹事長谷川まき子氏方に至り宿泊せり

四月二十七日午前八時三十分一行は伏木町發東礪波郡出町に向ひたり岡本町長を初め幹事會員十數名見送られ岡本加藤萱島の諸幹事は高岡迄見送られたり出町に着したるは十二時なりき箕浦顧問を初め同幹事部長幹事數名出迎はる一行は會場なる貫如院に到りたり午後三時より開館來會者約二百五十名例の如く講話を終りたるは午後五時三十分頃なりき當夜は稻垣旅館に投す

四月二十八日午前八時旅館出發仝郡井波町に赴きたり箕浦幹事部長を初め事務員清原氏同行會場なる瑞泉寺に到りたり大井幹事外數名吉川町長等出迎はる午前十一時より開會聽衆約六百餘名例の如く講話し閉會を告げたるは午後一時なりき當日佐野出町分署長奥井井波署長も出席佐野署長は一場の演說をなし勸誘に勉めたり

那須野の花（會員美談）

栃木縣下野國那須郡那須村字黒田原は日本鐵道線の一小驛にして戸數僅に百二十一軒に過ぎざるが、土地の幹事藤田よつ子並に奥村夫人の請に任せて、本會遊說員野中女史は講演會を開きけり。兩幹事等は大に女史の講演に感激し、黒田原驛内はいふまでもなく、那須野開墾地に散在せる家々にまでも入會勸誘を進め多數の會員を得てけるが、其際餘りに小さき家迄は勸誘しても無駄なるべしとて、殘し置きけるに、それ等の要女達は頗る不平を鳴し、吾々とて日本國民とは見認め給はぬか、何故に度外視せらるゝぞと、兩幹事に迫り來り、悉く入會してけり、さるにても家といへば、あはれ掘立小屋にして、疊戸障子だに無く、漸く其日〳〵を送る人たちのとなればと遠慮し置きたるならんを、其心根の殊勝さ、聞く人涙を催ほさぬはなかりきとぞ。

前にいへりしが如く、黒田原は僅に百二十一戸の驛にて、開墾地に散在せる家を合するも幾程もなき家數なるが、去にし四月二十九日現在會員の數は、特別會員十五名、通常會員百五十八名、贊助員九名、合計百八十二名の多數に達せりとぞ。而して其中二十五名は奥村幹事の勸誘にて、其他は悉く藤田幹事の入會せしめしものなりとぞ實に黒田原に至れる人は其家毎に愛國婦人會々員の標札あるに驚けりといふ。斯く迄に進める地は之を全國に求むるも恐らくは得難かるべしとぞ思はる。本會の模範村といふも決して過賞にあらざるべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

各地支部狀況

▲愛媛縣支部　愛國婦人會愛媛支部北宇和郡幹事部總會を五月五日宇和島に於て開會せり（津久頁一組七ヶ村は岩松に於て開會）當日は朝來降雨の爲め豫定の會場は伊達氏邸內天赦園なりしを俄かに宇和島高等女學校に變更し午後三時三十分講堂に於て式を開始す正面には紫地の幔幕を張り高座に總裁殿下の御尊影を奉置し右に大花瓶を置き右側は幹事席左側は來賓席にして安藤支部長中原少將を始め大道寺支部評議員丸山主事土居幹事部顧問篠田參與以下各町村長着席し會員は中央に着席せり斯くて最初に幹事部長土居チカ子開會の旨を告げ幹事御影の覆を撤し令旨の奉讀ありて一同最敬禮をなし次て支部長の告辭幹事部長の答辭ありて幹事御影の覆をなし一同最敬禮夫より土居顧問の演說山丸主事の事業報告に引續き支部長より委員囑託狀を授與され全く式の終了は午後四時なりき夫より一同は同町追手通融通座に設けたる會場に至りたるが其門前には大國旗を交叉し場內には無數の小國旗及各國の小國旗を縱橫に張り飾り正面の舞臺を餘興席とせり入口には各委員に饗應券を交附し場內各種の手踊淨瑠璃福引等の餘興は最も一同の喝采を博したり當日は雨天にも拘はらず遠來の參會者多きと午後雨ひに閉止みたるを以て近方の來會者亦尠からず其數約五百八十有餘名に達し頗る盛況を極めたり散會せしは午後六時過なりき

又去にし五月七日午後三時三十分愛國婦人會愛媛支部東宇和郡幹事部發會式を卯之町光教寺に於て擧行す其次第を記せば式場の表門に發會式の三字を書したる大額を掲げ國旗を交叉し道路兩側に球燈を吊し又式場內正面には總裁宮殿下の御尊影を安置し前のテーブルには大花瓶を置き右側は幹事委員席左側は來賓席として安藤支部長を始め大道寺支部評議員丸山主事會員は中央に着席せり當部の會員總數は八百拾六名にして內百四十六名は今回發會式擧行に際し特別に本部職員等の盡力に依り增募したるものにして當日出席の會員は參百〇七人なり幹事部長開會の旨を告げ一同起立幹事別宮マス總裁殿下御尊影の覆を撤し此間唱歌君が代の奏樂を使用せられ一同最敬禮幹事部長令旨奉讀及本會長祝電を朗讀し幹事部職員並に會員名簿を主部長に呈す次に支部長告辭あり且つ安藤支部長より本會の功勞者へ對し謝狀及び謝狀へ物品を添へ（木杯及紀念章）贈與せられたるもの拾七名あり會員總代としては會員清家フサ左の祝詞を朗讀せり「開け行く今の世に女子の務むべきわざ盡すべきわざ盡すべき道多かる中に愛國婦人會の如き一朝國に事ある日要子に別れ父母に別れ玉の緒の切れなんもいとはす御國の爲めとて竭す武夫の心を慰め後の憂ひなからん爲め同情いと厚き女子の眞心の集りて成立ちたる團體に心を協せ力を添ふる亦女子のつとむべきわざつとむべき道の一ならめ實にや泉の湧く如けん博愛に富める日の本の婦人はかくばかり淸き奧しき會に贊同加入するもの日に追ふて殖し今は早や全國會員五十九萬五千有餘の多きに達せりと聞くあな盛なるかな本部に於ても妾等亦此席末を瀆すの光榮を得しはこれ何物にか比べん妾等不肖の身ながら心ばかりの力を竭し誠をいたし本會の益千代かけて榮えん事を祈るになむ」、終て幹事別宮マス總裁殿下御尊影の覆をなし一同最敬禮夫より支部及び幹事部職員の事業報告あり之れにて式を終了し幹事部閉會の旨を告ぐ時に午後四時當日の參會者一同へは折詰辨當を配付し猶ほ餘興としては福引をなし且紀念の爲め會員一同へ扇子を贈與せり此日天氣淸朗にして參集せし會員一同歡を盡し散會せしは午後五時參拾分なりき

▲栃木縣支部　栃木支部鹽谷郡幹事部矢板委員部第一回總會は豫定の如く去月十三日矢板町長峯公園に於て開會せり當日午前十時會員一同參列全町委員は決議案を朗讀して異議なく可決し終つて招待員來賓順次着席するや總裁宮妃殿下御影に向つて最敬禮（奏樂）を行ひ委員の式辭中山支部長の祝辭鹽谷郡顧問同幹事部長矢板町幹事惣代等の祝辭あり最敬禮の後ち紀念品を一同に贈呈し式後茶菓及び午餐の饗應ありしが餘興としては小供手踊等あり全十一時三十分頃式全く終りを告げたり當日の來賓は

中山支部長、向井、矢板兩支部幹事、田上那須郡幹事部長、瀧田、野口兩幹事、鹽谷郡顧問

等にして其の外會員數百名出席頗る盛會を極め中山支部長其の他幹事諸氏は全地に執行したる全町軍人追悼會にも臨みて參拜し即日歸宮[illegible]しが支部長の祝辭は左の如し

明治四十年五月十三日愛國婦人會栃木支部鹽谷郡幹事部矢板委員部第一回總會を開く夫矢板町は女子人口僅に三千餘なるに會員三百十二名の多數を得たるは畢竟職員諸君が熱誠盡力の効果也と雖抑亦風俗敦厚にして博愛慈善の心に富むにあらざれば焉ぞ能く如斯盛大なるに至るを得んや庶幾くは自今倍々斯會をして隆盛ならしめ以て癈兵及遺族諸氏の窮を告ぐるものなきに至らしめんことを一言以て祝辭と爲す

明治四十年五月十三日　愛國婦人會栃木支部長　中山笑子

▲宮城縣支部　去る十二日を以て同會志田郡幹事部總會をば古川小學校講堂內にて開會せしが會員の來會する者五百餘名にして其の外贊助員の來會者五十餘名なり而して東京本部よりの遊說員野中女史及宮城支部員四村石橋の兩夫人の臨席ありしが頓がて時刻に至るや幹事部顧問岩淵俊夫氏起ちて開會の辭を述べ且つ故奧村五百刀自子の追弔文を朗讀し次に會務及會計の報告其れより有志者二三の祝辭にて晝飯を喫し次に派出員石橋夫人の挨拶あり後ち野中女史は愛國婦人會の主趣より說き出し且は東洋の形勢より延いて西洋各國の狀態に亘り猶戰後婦人の行動及旅順要塞に軍隊慰問の有樣に說き及ぼしたるが滿堂肅然恰も水を打ちたるが如く幾百の男女何れも感涙に咽ばざるものなきに至れり斯くて二時間餘に亘りての講話なりしも聽衆少しも倦厭の態なく熱心に聞き居たり次に幹事部長岩淵つな代子の答辭の後箏の合奏小學兒童の遊戲餘興にて閉會を告げしが恰好し同日は古川與武會の催しに成る劍士紅白對試合大會ありしにより同會の案內ありしを以て野中女史一行には重なる幹事部員と共に同會の擊劍道場に臨みて數組の試合を見て豫定の旅館に歸られぬ因に記す觀覽同日は古川婦人會員一同には全力を擧げて斡旋の勞を取り且晝飯等を寄贈されしと又高倉村婦人會員齋藤きゑ子には全村の會員を悉く出席せしめ御新入會員までを周旋されしは實に公衆婦人の模範とすべき活動なりき

▲北海道支部　今回有珠郡伊達村愛國婦人會々員石山辨子より同會基本財產造成の目的にて桑苗五千本の寄附ありしかば同會にては同村字梅本町の地二反五畝歩へ植付け造成桑園を造設せんとて去る五日を以て悉く實植したる由なるが今當日の景況を聞くに早朝より曇天にて小雨さへ降出でければ實植如何と一同案じ居たる程なりしに八時頃より雨止みたれば各部落より五十餘名の會員は思ひ〳〵の農具を携へ甲斐々々しく輕裝して三々伍々手代木幹事（村長夫人）の邸に參集せしがそれより實植地へ繰出し先づ伊達幹事（男爵夫人）指揮の下に繩張りし進んで實植する事二時間餘に及び少時再び細雨霏々と降出しければ一旦休憩所に入りて晝飯の辨飯を喫し冷水を飲みなどして晴れを待居る中雨は烈しく盛んに降出し何時止む氣色も見えざりしかば如何にせんと一同柳眉を顰めたる時會員の一人は陸海軍人が戰場の苦艱を思はゞ妾等が雨中の實植とて何程の事やあらんと勇ましく言出せるにぞ是に力を得て午後は降りしきる大雨の中を浸して實植し遂に午後三時頃に至り全園悉く實植し終り一齊に鬨の聲を上げて引上げたる目ざましき働きには同地方一帶の農民等も頗に感歎措かざりしとは然もあるべし

▲新潟支部　去る十九日午前九時より中蒲原郡五泉町に於て同會五泉分區發會式を擧行せし處出席一百餘名にて頗る盛會なりしが新潟支部より主事高內眞賢氏が臨場せり

▲佐賀支部　佐賀支部に於ける四月末日現在の會員數は特別八百九十三名、普通八千二百八十一名の由にて其の各郡市別及び女子人口數に對する會員の百分比例は左の如し

	特別	普通	計	百分比例
藤津郡	五五	一、三五三	一、四〇八	三、九一
佐賀市	二六五	三四五	六一〇	三、四八
東松浦	一五五	一、五一九	一、六七四	三、二二
西松浦	六四	一、〇一八	一、〇八二	三、一二
神埼郡	八〇	六三一	七一一	二、八八
杵島郡	八七	一、二五八	一、三四六	二、六九
小城郡	五七	八〇〇	八五七	二、六七
三養基	五三	五二一	五七四	二、〇六
佐賀郡	七七	八三五	九一二	一、六七

▲德島縣支部　德島商業會議所にては輓近重要海外輸出品の一たるドロン、ウオーク（手巾の刺繍加工）に就て益に一般に加工從事の奬勵を爲さんがため調査する所ありしが偶ま愛國婦人會當支部に於て右事業に着目し同支部主腦となりて之が製作奬勵を爲しつゝあるを聞き調査書類を擧げて本會支部に委囑せし由

▲山形縣支部　西田川郡幹事部の催しにて日清戰役に戰病死せる同郡出身の軍人軍屬の忠魂法會を去る廿七日正午より鶴岡町常念寺に開きたり導師住職某師として讀經し山宮幹事部長並に顧問山宮氏、林鶴岡町長等の弔詞それより參會者一同の燒香あり午後二時式を閉ぢたり又同日故奧村五百子女史追悼大法會ありたり午後三時先づ讀佛式の讀經あり次に山宮幹事部長山宮顧問各町村惣代鶴岡町長等の弔詞燒香あり左に顧問山宮成一氏の弔詞を掲ぐ

弔詞

滿腔熱血　披瀝宇內
朝叱鐵門　夕踏群營
拾年雄圖　惟忠惟愛
六拾萬員　堂々團體
淸露兩役　跋渉邊塞
沐雨櫛風　親慰軍隊
留聽耳順　實入晉昧
望恩優洽　特有大賓
絕世女豪　仰如泰岱
一據香烟　無量泚慨

明治四十年四月念七日
愛國婦人會山形支部西田川郡幹事部顧問
從六位勳六等　山宮成一

▲熊本縣支部　去月廿日午前一時赤十字社支部に於て愛國婦人會熊本支部例會を開く來會者は押川支部長及び石原支部副長以下三十餘名にして特に尙絅女學校敎師築山順子の料理法南木氏の講話河內山主事の會務報告あり終つて午後四時散會せり

▲新潟縣支部　新潟縣臨潟町總會を同町小學校に開き出席者員百餘名にして田中郡視學の演說ありたり又新潟愛國婦人會支部幹事は去月二十四日午後一時より市役所樓上に於て軍人遺族慰問に關する件に付き協議會を開けり

▲愛媛縣支部　越智郡幹事部にては岩城村長黑瀨喜代松氏へ、同南宇和郡幹事部にては中尾正忠、藤原保顯氏へ各區委員を囑託せり。又新居郡飯岡村特別會員植松代子は同支部基本金の內に金三十五圓を寄附したり

▲廣島縣支部　幹事賀屋鐐子女史は去る廿五日より安佐郡地方を巡回本會員募集の爲め講話會を催ほせしが該巡回日割幷に講話會場等は左の如し

巡回日割	講話時刻	開會場
五月廿五日	正午十二時	鈴張村長覺寺
同　二十六日	同	三入村四光寺
同　二十七日	同	可部町品窮寺
同　二十八日	同	深川村州法寺
同　二十九日	同	伴村[illegible]念寺
同　三十日	同	安村正[illegible]寺
同　三十一日	同	緑井村專藏坊
六月一日	同	三川村淨宗寺
同　二日	同	口田村敎蓮寺
同　三日	同	祇園村勝想寺
同　四日	同	三篠町光隆寺

▲長野縣支部　東筑摩郡幹事部にては先頃幹事會を開き松本に市制實施の結果同幹事部を動ひ分立せざるべからず故に松本市政成立の曉即ち來る八月頃に於て分立引繼ぐ事、會費未納整理等は各幹事の分擔に依り其の責任を帶ぶる事、會員募集は幹事部分立の如何に拘はらず募集する事等を決議したり

▲鹿兒島縣支部　人吉支部にては飯本禮稱長氏を招聘し去月下旬五日間人吉町劇場永樂座に於て慈善音樂會を催せしが連夜札止めの盛況を呈し收入四百圓餘に上れり

▲島根縣支部　石見國美濃郡大麻村字祖父ヶ瀨愛國婦人會員發起となり字內婦人の主催にて在瀨軍人藤本常吉以下七名を去月九日大橋區長宅に招待して饗應せし由

▲青森縣支部　西海青森縣支部長は客歲以來各郡市に於ける遺族廢兵慰問會に出張して會旨の普及に奔走し又は慈善演藝會につき百方盡力したる愛國婦人會の關係職員一統は去月十二日午後一時より官邸に招き高尙にして趣味ある慰勞園遊會を催せり

愛國婦人編輯人手島益雄都合に由り解職候に付自今當發行所と關係無之候間此段廣告候也

明治四十年五月廿五日

愛國婦人發行所

▲韓國仁川に於ける奧村女史追悼會と紀念牌　故奧村五百子女史は仁川本願寺別院の創立に淺からざる緣故あるを以て同別院に於ては去る九日午後三時より在仁の重なる官民愛國婦人會會員其他多數を別院に招待して盛大なる追悼の法會を營し由尙ほ仁川愛國婦人會支部にては同別院庭內にて同女史の紀念碑の建立の筈にて相談略ぼ一定し居る由又京城にては去る十四日の夜朝鮮京城の歌舞伎座にて愛國婦人會演藝會を開催し伊藤統監を始め韓國大官多數臨場し盛會を極めたりと

▲石川縣支部　鹿島郡分會にては去る十四日當町光德寺の一隅を借受け蒐集物品を陳列賣却したるが總數千五百十八點の多きに及び賣却金高は十四日九圓二十二錢二厘、十五日二十三圓六十八錢一厘、十六日二十一圓餘となり尙賣却殘品多數あるを以て近日幹部會を開き相當處分を爲すべしと

發行兼印刷人　山澤俊夫　編輯人　大久保高明　發行所　愛國婦人會內愛國婦人發行所　印刷所　東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

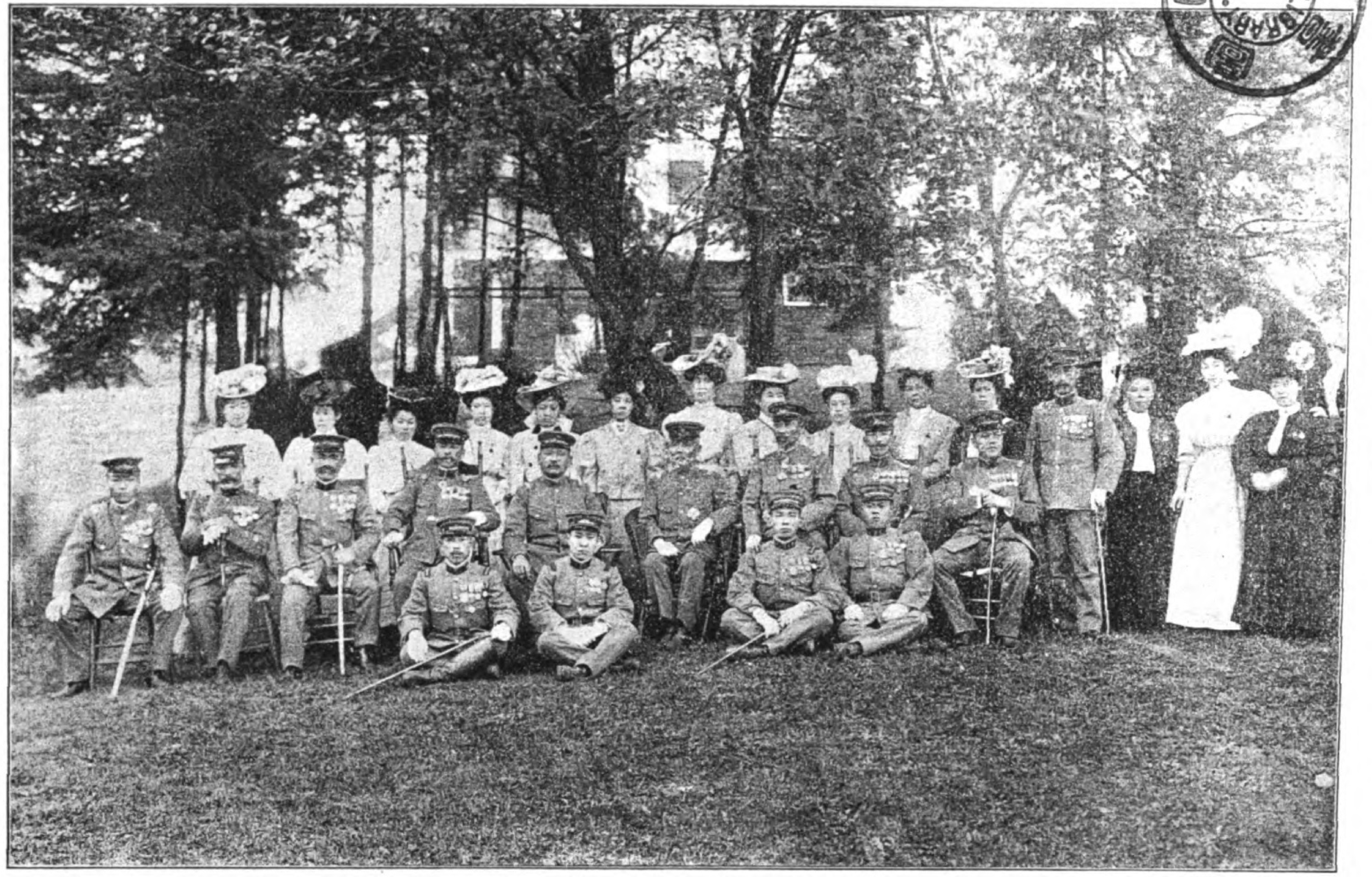
明治三十五年三月二十七日第三種郵便物認可
明治四十年六月五日發行（毎月二回五日廿日）

IMPERIAL LIBRARY 帝國圖書館

拜啓陳者今般米國ゼームスタウン開國三百年祝典會へ參列の爲御出張相成候帝國陸軍代表者陸軍大將黑木男御一行當地御通過に付明治四十年五月三日當地久水領事官舍宴會の後同庭内に於て愛國婦人會會員同席撮影仕候に付愛國婦人へ附掲載の爲及御送候御查收被下度右は至急の際故間に合ふたる少數の會員のみに止まりしは甚遺憾の至に候右申上候也

明治四十年
五月十三日
シヤトル
愛國婦人會
委員部長
久水和歌子

愛國婦人會本部
御中



四非みさを子　久水うた子　太田かれ子
望月和子　築野つや子　平出すなほ　増田貞子　梅澤陸軍少將　久水和歌子　黒木大將　大澤富子　平出はま子　木越陸軍中將　砂田さだ子　萱野華子　坂本歌子　四依ふよ子

發行兼印刷人　山澤俊夫　編輯人　大久保高明　發行所　愛國婦人會內愛國婦人發行所
印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN